

「新興国・老大党」の蹉<sup>さ</sup>跌<sup>てつ</sup>と試練（続1）  
——「王八蛋<sup>バカヤロー</sup>工程<sup>こうじ</sup>」「571（武起義<sup>クーデター</sup>）工程<sup>けいかく</sup>」に  
窺えた「先軍党国」の劣化・変質

夏 剛

「豆腐渣<sup>おからこうじ</sup>工程<sup>こうじ</sup>」露見元年」の意味：「権貴社会主義<sup>カジン</sup>＋賭博資本主義」複合汚染の顕在化

世界2位の経済大国の交代直後の2011年に旧・新双方は其々大きな天災と人災に見舞われ、高度成長期の「昇龍」の勢いが跡形も無く遂に転落した方では「3.11」東日本大震災が起き、大躍進を遂げた「巨龍」の方では135日後に「7.23」高速鉄道追突・転落事故が発生した。東北地方太平洋沖大地震は日本観測史上最大で1900年以降の世界4位の超大規模（M9）で、犠牲者数（死亡15,889人・行方不明2,594人）は阪神・淡路大震災の約2.9倍に当る。戦後2位の兵庫県南部地震と東日本大震災を繋ぐ「時環」（時間的な連環。造語）として、前者の発生時刻（5時46分）は後者の同協定世界時5時46分（日本時間14時46分）と重なる（秒単位では其々52秒台と18秒台）。俱に自由民主党の結成後の2回の下野又は非第1与党の時代に起きたのも不思議であるが、阪神大震災は非自民・非共産連立政権（1993.8.8～94.6.30）の次の社会党・自民党・新党さきがけ連立政権（～96.11.7）の下（時の首相は社会党の村山富市[94.6.30～96.1.11]）、東日本大震災は民主党・社会民主党・国民新党連立政権（2009.9.16～10.5.30）に次ぐ民・国連立政権（～12.12.26）の下で起き、又何れも翌年の暮れに自民党は単独政権への復帰か公明党と組み主導を為す連立政権の実現を果たした。自民党長期執政中の断層での突発は政治の混迷や与党の非力の際を衝いた様であるが、唐山大地震も毛沢東政権末期の周恩来死去・「4.5」天安門事件後の虚脱期に襲来した。

唐山大地震は震央が東日本大震災と同じく世界的に地震多発の北緯40度地帯に在る（39.6度、38.3度）が、死者は汶川大地震と同じ14時台に起きた東日本大震災の犠牲者（含<sup>ふくむ</sup>・行方不明）の13倍も有る。震央の緯度が阪神大震災の34.6度に近い35.3度である関東大地震（1923年9月1日11時58分、M7.9）も、死者・行方不明者の10万5,000人余りは日本災害史で最大規

模の記録を残したが、世界地震史上最悪と為る中国陝西省華県大地震（1556年1月23日、M8）の83万人の1/8に過ぎない。日本人の4大恐怖の中で「地震・雷・火事」の後の「親父」は「大山風」（台風）が語源で、関東大地震の犠牲者の87%（10万5385人の内9万1781人）が正に台風の影響で加勢・延焼した火災が死因と成り、約4万人が避難した陸軍被服廠では約3万8000人が大火で焼死し折り重なる様に埋め尽した。<sup>54</sup> 台風と無縁の内陸部に在る華県を中心と為す大地震の被災は5省・101県の広域に及ぼし、火事・水害・疫病・飢饉に由る死亡も相当有るが桁外れの犠牲は圧死が圧倒的に多かった。震央の緯度が華県（34.5度附近）と略同じの阪神大震災でも約8割が家屋の下敷きと成って即死したが、日本の木造と違って中国の家屋は煉瓦造りが主流でその倒壊の致死性は半端ではない。伯・露・印・中の英語の頭文字を合せた BRICs は brick（煉瓦）に掛けた造語であり、中国語の意識「金砖4国」（金の煉瓦なる4カ国）は確実な価値創出の寓意にも対応するが、唐山・汶川の大地震が端的に示した様に安価な建材である煉瓦は凶器と化す時も間々有る。

中国の政治統治から言語表現まで多くの事象には石炭の様な硬くて重い特質が見られるが、ネット用語の「拍磚」（煉瓦で叩く。転じて、他者に異論を投げ掛ける文章を張り出す）も、煉瓦の重量感と殺傷力に因んで攻撃・逆襲・非難乃至罵倒の「敲打」を表す諧謔である。温家宝は総理在任中の最後と成る全人代・全国政協年會閉幕後の記者会見（2012.3.14）で、「網民」の「拍磚」は正常の現象でその声は政府にとって示唆的な影響が多いと述べた。央視記者からの官製質問は電脳網を好く利用し民意を重視すると言う温の宣伝にも成るが、温は自分に対する「謠諑」（中傷誹謗。流言）に些か苦痛を禁じ得なかったと心中を吐露した。独立した人格を理解して貰えない事が悔やまれる故に社会に対して幾分憂慮しているが、「人言不足恤」（人言は恤うるに足らず）という勇氣を持ち続けて行く決意を表明した。唐山大地震35周年に当たる日に「7.23」事故の現場で記者に病気を公表した挙動と同様に、党・国家の指導者が内外向けの公式発言で私的な不平・心痛を訴えるのは余り類を見ない。「謠諑」の字形から連想される「揺」「啄・逐」は「拍磚」の強力・執拗さを感じさせるが、敵対的な「拍磚」はネットワーク上の「炎上」を引き起す「火事+親父（大山風）」の燎原に対して、「雷」や類義の「親父の叱り」の如く身・心の創傷を与え「石打ち処刑」に成りかねない。

「拍磚」の「磚」はネットワーク上の文章の煉瓦じみた塊状や中身の迫力を言い得て妙であるが、同じ中国語独特の「敲門磚」は名利を求める初歩的な手段の譬えで競争の厳しさを思わせる。ベートーベンの『交響楽第5番』の通称は冒頭の旋律の「運命が扉を叩く」形象に拠るが、『運命』の由来と成る作曲家のこの名言を捩れば「敲門磚」は運命の扉を叩く煉瓦とも言える。初演（1808.12.22）の恰度170年後に閉幕した中共第11期3中総会の改革・開放路線採択は、正に「命運在敲門」（運命が扉を叩く）中の「敲命運之門」（運命の扉を叩く）である。黄河の急流に在る龍門の滝を登り切れた鯉は龍に化すという言い伝えから来た「登龍門」は、出典『後漢書・

党綱伝・李膺』の原文から「鯉魚跳龍門」（鯉が龍門を跳び越える。鯉〔龍門〕の滝登り）という熟語が派生した。世界2位の経済大国の座に登った「跳龍門」完遂の直後の「7.23」列車追突・転落事故は、「追・尾」の字面の様に猛追の掉尾の一振りでも勢いが余って掠め傷を負った様なものである。人口・国土面積に比例する天災・人災の規模が示す様に中国の発展は無傷ではいられず、例えば震災は「地震大国」の日本に比べて密度こそ及ばないものの犠牲者の絶対数が多い。34の1級行政区の中で浙江・貴州・澳門だけは20世紀にM6以上の地震が無かったが、建国後最大規模の汶川大地震の3年後の温州高速鉄道事故は災厄の多様・普遍を現した。

汶川大地震では「豆腐渣工程」（豆腐殻〔手抜き故に脆弱な〕工事）に由る倒壊が多く、教育予算の貧弱等にも起因した校舎の崩れ易さで4桁の学生を死なせて人々の心を痛めた。<sup>55)</sup> 「地震・雷・火事・親父」に当る中国人の「最恐」物は先ず「洪水・猛獸」が挙げられ、汶川大地震の10年前の国内最大の災害は長江と東北の松花江流域嫩江等の大洪水であるが、8月7日に要地の江西省九江を視察する朱鎔基総理は有るまじき堤防倒壊の報告を受けて、失望と激怒を抑え切れず「豆腐渣工程、王八蛋工程（馬鹿野郎工事）！」と罵声を上げた。<sup>56)</sup> 多くの国語辞書で品位の為か立項されない「王八蛋」は「王八」に來ている（「蛋」は卵）が、「龜。鼈」「妻を寝取られた男」「売春宿を經營する男」を指すこの2字の侮辱語の他に、「忘八」（孝・悌・忠・信・礼・義・廉・恥という8つの徳を忘れていた）の意も加えて、「王八蛋」は恥知らずや馬鹿者に言い「国罵」の「他媽的」（畜生）より数倍も強烈である。「文革」中の「9大」（1969.4.1～24）で茶番劇の様に中央委員に選ばれた労働者王白旦は、この氏名は読み間違えると余り聞えが好かないねと座談会で司会の周恩来にからかわれた。後に2人の最高・準最高指導部成員（政治局常委・委員）の意思で「白早」「百得」と改名した<sup>57)</sup> が、「王八蛋」との混同を嫌う過剰な体面意識はこの禁忌の罵り言葉のきつさを物語っている。

件の温総理記者会見の恰度59年前の「バカヤロー解散」（1953.3.14）が思い起されるが、同年2月28日の衆議院予算委員会で吉田茂首相は社会党の西村栄一議員との質疑応答中、自席に戻る際ボソッと「ばかやろう」と呟く様に吐き捨てた為に舌禍事件を惹起した。年70歳過ぎた総理大臣が取り消した上からは追究しないと西村は吉田の撤回後に了承したが、社会党右派の反撥で懲罰動議と内閣不信任案が相継いで可決され吉田は衆議院を解散した。74歳の首相の不用意な独り言に由って自由党は「4.19」総選挙で議席減の損害を蒙ったが、71歳に成る目前の朱総理が地元の責任者等に雷を落した際の「王八蛋」は自覚した罵語で、然るべき叱りは関係者を心服させ国民の喝采を浴び「豆腐渣工程」の新語に異彩を放たせた。「7.23」事故後の『南方都市报』の鉄道部を譴責する「他媽的!!!」と好一對の罵倒であるが、言わば「豆腐渣工程」露見元年の幕を切って落したこの出来事の翌99年の1月4日、重慶市綦江彩虹橋が突然全部崩れ落ち「7.23」追突・転落と同数の40人の死者を出した。12月20日の澳門返還で内外に対する自信・威信が高まった中国は足元に破綻が出て来たが、九江防波堤の増設と綦

江彩虹橋の完工が95、96年である事は江沢民時代の腐敗<sup>あかし</sup>の証に成る。

1998年の長江大洪水は北京五輪開会式<sup>ちようど</sup>の恰度10年前の8月8日に重大な危機に瀕し、前夜の政治局常委会緊急会議は党の存亡に関する27年「8.7」政治局緊急会議を想起させる。世紀最大の54年全流域大洪水でも「8.8」に要所と為る湖北省荆州市監利県の堤防に達し、36.54<sup>トン</sup>の高い水位に鑑みて分流区の損害を覚悟で人為の決壊に由る放流が強行されたが、今回も同じ立秋の日に同地点で水位が38.08<sup>トン</sup>に上昇し堤防が決壊寸前の瀬戸際<sup>けい</sup>に立った。<sup>58)</sup> 朱総理は荆州堤防への視察で温家宝副総理兼国家防汛抗旱総指揮部総指揮（国家水害・旱害防止・退治本部本部長）に対して、分流か否かを決断する「核按鈕」<sup>ボタン</sup>（核[兵器使用許可指令]の鈕）を国防総に委ねるという前日の政治局常委会の決定を伝えた。<sup>59)</sup> 多数の住民・家屋等の存亡に関する非常事態の下での究極の意思決定を形容するこの表現は、人類史上唯一核爆撃を受けた日本の平和国家らしい感覚では不穏当極まり無いものである。日本流の「下駄を預ける」と次元が全く違う「核按鈕」<sup>ボタン</sup>付与は「先軍」の色彩を帯びるが、激甚被災地に部隊<sup>いちばや</sup>が逸早く駆け付けて至難の救援に当る「軍先」の伝統は称賛に値する。唐山大地震発生<sup>げん</sup>の4時間半後に中南海で数人の副総理が救援の指揮を執っている最中に、軍委常委・北京（華北広域）軍区司令官・党委第1書記でもある陳錫聯<sup>しやく</sup>は要請を受けて、即座に唐山附近の各野戦軍部隊の番号・駐屯地を報告し緊急動員・派遣の手配を始めた。同じ頃に李德生瀋陽（東北広域）軍区司令官から部隊応援の用意が出来たとの連絡が有り、約2時間後に北京軍区・空軍の指揮要員が河北省委の関係者より先んじて現地入りした<sup>60)</sup> が、「人民の子弟兵」の責任感から軍が先駆けた即応は人命救助を求める危急時には心強い。阪神大震災では自衛隊は権限・法規の縛りに囚われて自治体の要請を待ち出動が遅れた<sup>61)</sup> が、中隊1個の移動でも軍委主席の許可が要る毛沢東時代の鉄則<sup>62)</sup> はこの際には適用しなかった。

1998年8月13日、江沢民は湖北荆江の洪水被災地へ赴く飛行機の中で軍委副主席・政治局委員張万年から、軍・武装警察の13万人の出動に200万余りの民兵も加わった今次の水害緊急対応行動は、解放戦争（「第3次国内革命戦争」, 46.6.26～50.6）以来我が軍が長江沿岸で最も多く兵力を投入した規模であり、中央の規定に由り救援部隊は全て国家防汛抗旱総指揮部の指導・指揮を受ける、と報告された。<sup>63)</sup> 汶川大地震の時に温総理は直接電話で要請しても現地部隊を動かさず無然として切った<sup>64)</sup> が、文官の彼は10年前に制度の担保と軍委主席の了解で制服組の副主席の支援を得たのである。温は大洪水との闘いで技術官僚出身の能吏の手腕を振り5年後の総理就任に繋がったが、史上初の軍歴の無い軍委主席の時代（89.11.9～2004.9.19）に始まった軍統治の劣化も1因と成るか、今度は国务院抗震救災指揮部総指揮（震災救援本部長）を兼務しながら壁にぶつかった。毛沢東・鄧小平時代と違って軍人出身者が皆無の副総理の上に立つ朱は辣腕で名高いが、宰相の権威が有っても九江市政府さえ把握し切れない「豆腐渣工程」には無力であった。彼の怒鳴りも空しく手抜き工事は根絶できず汶川大地

震の校舎倒壊で突的に表面化し、原因究明・損害賠償請求の動きが当局に封じ込められた事で代償<sup>たいけい</sup>は更に次世代へ回された。

汶川と同じ龍門山断層に在る四川雅安市蘆<sup>ろ</sup>山<sup>ざん</sup>県で2013年4月20日8時2分に地震が発生し、M7の規模と死者196人・行方不明者21人の犠牲者数は汶川大地震の比ではないが、23日の政治局常委会の会議では黙<sup>もく</sup>禱<sup>たう</sup>が捧げられ習近平は翌月21日に慰問の視察を行った。震央(北緯30.3度, 東経103度)が汶川大地震(31度, 103.4度)に近い今回の震災は、習総書記・国家主席・军委主席+李克強総理体制の誕生直後に起きた大きな災難である。就任37日目の李は前回の2時間と10分後に現地へ飛んだ前任に倣<sup>なま</sup>って13時15分に発ったが、習の遅い現地入りが示す様に被害の大差に由<sup>よ</sup>って汶川大地震の時の悲壮感が余り無かった。5年前と比べて救援活動の洗練度の他に情報伝達の面でも刮目すべき進歩が見られており、例えば発生<sup>はつせい</sup>の5秒後に成都高新減災研究所の「官<sup>お</sup>方<sup>ふ</sup>微<sup>い</sup>博<sup>ぼ</sup>」<sup>オフィシャル・ミニ・ブログ</sup>に由る蘆山地震第1報が発せられ、同14秒後の「M6.4」とする情報発信は同48秒後の中国地震局傘下の「中国地震台網」の「官<sup>お</sup>方<sup>ふ</sup>微<sup>い</sup>博<sup>ぼ</sup>」<sup>オフィシャル・ミニ・ブログ</sup>の第1報の「M5.9」よりも速くて精度が高い。<sup>65)</sup> 汶川大地震の震央附近の工場から40<sup>き</sup>離れた都江堰市へ向う譚<sup>たん</sup>斌<sup>びん</sup>(管理係, 男性, 56)は、余震が続き道路が寸断した極限状況下で最大の恐怖は外部との連絡断絶であると痛感した。決死の迷走避難行で発生から24時間半経って漸く行く先まで20<sup>き</sup>の地点に辿り着いた処、不通の儘でいた携帯に突然「都江堰天氣予報」の「短<sup>たん</sup>信<sup>しん</sup>」<sup>ショット・メール</sup>が入った事で生還を確信した。<sup>66)</sup> 北京五輪の直前には僻地でもこの様に携帯は可<sup>か</sup>也<sup>なり</sup>普及していながら自ずと限界も有ったが、上海万博の翌年の「微<sup>い</sup>博<sup>ぼ</sup>」<sup>ミニ・ブログ</sup>急増に由<sup>よ</sup>って蘆山地震では命の綱と為る通信手段は更に増え、電話・携帯が不通でも無<sup>む</sup>線<sup>せん</sup>網<sup>ま</sup>絡<sup>らく</sup>等<sup>らう</sup>で「微<sup>い</sup>博<sup>ぼ</sup>」<sup>ミニ・ブログ</sup>「微<sup>い</sup>信<sup>しん</sup>」<sup>ミニ・ブログ ウェイシン</sup>(WeChat, 中国版LINE)の携<sup>せ</sup>帯<sup>たい</sup>軟<sup>なん</sup>件<sup>けん</sup>を使う連絡が可能に成った。<sup>67)</sup> 反面、汶川大地震後の再建分も含む同県の建物が略<sup>はぼ</sup>全て損傷した事で「豆腐渣工程」の疑いが持たれた。<sup>68)</sup>

汶川大地震の時の四川省委書記であった劉奇葆<sup>ほ</sup>(2007.11~12.11在任)は今回、已<sup>すで</sup>に習近平体制の中央政治局委員・書記処書記・宣伝部長と成っているが、震災地の「豆腐渣工程」や鉄道部の乱脈体質への追及に対する阻止では四川省と中宣部は共通している。「豆腐渣工程」は21世紀初めに国語辞書にも収録された程「新常態」<sup>ニュー・ノーマル</sup>と化しているが、朱鎔基が「王八蛋工程」の断罪の理由として挙げた「人命関天」(人命に関する重大事)は、北緯30度線を挟んだ汶川と温州(28度)に降り掛った天災と人災で再認識させられた。両地の緯度の間に在る蘆山の地震で「豆腐渣工程」が確認されれば08年の恥<sup>ち</sup>の上塗りに成るが、「和諧号」追突・転落に比べて小さい恥部とも言えるこの不都合な真実の根源を探れば、施工の質の悪さや予算の不足又は汚職に由る減少より無理な工期設定が要因として大きく、高速鉄道建設の大問題には国威発揚の意気込みが強過ぎた政治優先の突貫工事<sup>とつかん</sup>が有る。11年6月30日の京滬高速鉄道の開通も「7.1党慶」への「献礼」(祝賀<sup>けんじょうもの</sup>の献上物)であり、世界最上級の建設規模・運行速度に対する貪欲な追求は妙な「土・洋」結合を内包している。「7.23」事故が起きた温州は商魂<sup>たたくま</sup>逞し

い土地柄で「資本主義の温床」の様相を呈しているが、「貪官」(汚職官員)劉志軍が「中国高鉄之父」(中国高速鉄道の父)と呼ばれる事と共に、江沢民時代後期から顕在化した「権貴社会主義+賭博資本主義」の複合汚染を窺わせる。

建国後の鉄道事故で人災に由る最多の死者(126人)を出した1997年「4.29」惨劇は、発生地<sup>カジノ</sup>の湖南と追突車・被追突車の番号「324→818」で毛沢東と「文革」を連想させる。始発駅の長沙は毛が12～18年に数校(最終は湖南省立第1師範学校)で勉強した地であり、彼は19～23年に生地<sup>クライマックス</sup>の湖南湘潭県に近い同省都で革命運動に従事し母校の教員を務めた。「文革」初期の個人崇拜の高潮で「4個“偉大”」(4つの「偉大な」)の賛辞が踊り出て、当人はその「偉大的導師、偉大的領袖、偉大的統帥、偉大的舵手」(偉大な導き手・偉大な領袖・偉大な統帥・偉大な舵取り)を褒め過ぎとして嫌った。半面、「導師」(大きな事業・運動で方向性を指示し政策を掌握する人)だけは認めると言ったが、現代で一般的に指導教官を指すこの言葉に対する例外扱いの理屈として教員の経歴を挙げた。<sup>69)</sup>「4個“偉大”」の原型は66年8月18日に天安門広場で開かれた百万人の「紅衛兵」集会で、陳伯達中央文化革命領導小組組長(「文革」指導本部長)と林彪が其々一部唱えたものである。陳の「偉大的領袖、偉大的導師、偉大的舵手」と林の「偉大統帥」とを合成する形で、2日後の『人民日報』社説『毛主席和群衆在一起』(毛主席は大衆と共に)で「4個“偉大”」は打ち出された。毛の政治秘書(39～70)を務めた陳は9期1中総会(69.4.28)で政治局常委に選出され、林は「9大」採択の新『党章』(党規約)で毛の親密な戦友・後継者であると明記されたが、「8.20」社説<sup>ちょうど</sup>の恰度7年後の中央決議で「林陳反党集団」の頭として党籍を永遠に剥奪された。

理論家の陳は林への接近が毛の不信を買い第9期2中総会(1970.8.23～9.6)で失脚したが、開催地<sup>Lú shān</sup>の廬山は江西九江に在りこの文脈で「豆腐渣工程」の語源とも廬山地震とも繋がる。毛に追い詰められた林は翌年9月12日深夜に慌てて不可解な緊急離陸でソ連の方へ飛び、翌日未明に妻の葉群(政治局委員)・息子の立果(空軍作戦部副部長)と共に蒙古<sup>モンゴル</sup>で墜死した。5人の政治局常委中の2人を相継いで打倒した領袖の支配欲・権勢は俱に「超絶」級と言え、「9大」の中央委員会選挙で満票を獲得した要人が毛しか居ないのも神格性<sup>カリスマ</sup>の象徴である。満票(代表1512人中2人欠席)を得て170人の中央委員(他に委員候補109人)の1人に選ばれた唯一の別人は、労働者階級の代表として黒龍江省齊齊哈爾<sup>チチハル</sup>製鉄所から掻き集められて来た王白旦である。34歳の彼は高度の政治とは無縁で自分に票を入れる事の後味の悪さと危険性が全然分らず、図らずも主席と比肩して<sup>しま</sup>了う結果は他の代表たちの衝撃・不快を招き「不遜」と罵られた。政治の翻弄は又「王八蛋」と聞き間違い易い名前を「王白早」に改めた陳伯達の失脚後、江青(毛夫人、元「中央文革」副組長、政治局委員)に「王百得」に直された事にも現れる。<sup>70)</sup>江青等の極左「4人組」も毛の逝去直後に華国鋒主席主導の「宮廷政変」で逮捕されたが、毛沢東時代の終焉を告げるこの転換点の76年「10.6」はある「時環」の1端を成している。

「4個“偉大”」の原型が叫び出されたのは毛の声望が生涯の頂点に達した日の事であり、「文革」の怒涛を巻き起したこの祭典と「文革」急先鋒の江青等の逮捕の恰度ちやうどの中間点は、奇しくも林彪が妻子と共に別荘から「叛逃」の特別機へ急行した1971年9月12日である。89年「6.4」惨劇は戒厳部隊に由る天安門広場制圧を「血の日曜日」の基準としているが、広場への挺進を急ぐ軍の無差別発砲は3日夜11時過ぎに始まり翌日未明に続いたのである。「9.13」も国境を越えた瞬間及び緊急着陸失敗の結末の日付を用いた事変の命名であるが、前夜23時台に林彪等が警備隊の阻止を突破して車で軍用空港へ狂奔した事で歴史が動いた。「66.8.18」とも「76.10.6」とも1851日の間隔が有るこの日は動乱の「天数」が宿るが、「吉祥数」揃いの「66.8.18」の語呂合せの「路路発一発」lù lù fā yī fā（全ての路で一儲けする）は、「97.4.29」事故の「818」車の被害にも見られる様に靈験への期待が外れることが多い。追尾車「324」は丁関根鉄道部長免職後の「88.3.24」事故の追い掛けが示した不吉の他、林立果の意思で一味のメンバーが起草した政変構想概要（71.3.22～24）の脱稿日と符合する。

政治局常委の1/4と委員（委員候補4人を除く）の2/21に当る林彪夫妻の敵国への亡命は、「死せる副統帥、生ける統帥を走らす」とも言える程毛沢東に建国後の最大の打撃を与えた。毛は心身の衰弱で翌年2月12日に一時危篤ほどに陥り精彩を欠く不調が物故まで続いたので、この「変故」biàn gù（不慮の出来事。災難）は彼を「病故」bing gù（病死）に至らせかねない毒性が有る。毛は強靱な生命力を以て死線を越えて同月21日ニクソン米国大統領との会談に臨んだが、1年半後の「10大」開会日には散会時に自力で椅子から立ち上がることさえ出来なかった。<sup>71)</sup> 再び公衆の場に姿を現さない様に成った彼は極短い言葉しか発せなかったその日と同じく、往年の雄弁が微塵も無く難病の筋萎縮性側索硬化症しんしゆくせうそくかじやうしやうに由る言語障害で失語の危機に直面した。「9.13」の衝撃と153日後の瀕死は心・身への致命傷として人生の下り坂の起点に成ったが、「人・言」の組み合わせから成る「信」の威信・信頼の失墜こそが立ち直れない重傷である。

孔子は「足食足兵、民信之矣」（食を足し兵を足し、民をして此を信ぜしむ）を政治の要とし、どうしても已むを得ず捨てるなら3つの中でどれを先にするかという子貢の質問に対して、先ず「去兵」（兵を去らん）、次に「去食」（食を去らん）と答えた。「裁軍」（軍縮）を第1に挙げた別の意味の「先軍」は如何にも儒教の平和志向らしいが、「去食」の理由と為る「自古皆有死、民無信不立」いにしえみな（古より皆死有り、民は信無くんば立たず）は、餓死者が出て動じない冷徹さを感じると共に信を統治の命綱とする処には領けられる。毛沢東は1965年6月16日に第3次国民経済5ヵ年計画（66～70）の構想報告に対して、立案の際に考慮すべき要素は第1が「老百姓」（庶民）、第2、3が「打仗」（戦争）、「災荒」（天災・凶作）であると指示し、「不能喪失民心」（民心を失うことは出来ない）、「脱離老百姓毫無出路」（庶民から遊離すると未来は全く無い）と強調した。<sup>72)</sup> 周恩来は8月23日の國務院第158回全体会議でこの3要素を、「備戦、備荒、為人民」（戦争に備え、凶作に備え、[全ては]人民の為に）と要約した<sup>73)</sup> が、順番・

発想俱に『論語・顔淵』の中の儒家「導師」が提示した「兵・食・民信」と通じる。

李富春副総理兼国家計画委員会主任の主導で計委党組が提出した当初の「35計画」案は、農業を首位に据え「吃穿用」（衣・食・日用品）の解決を力点とする民生中心の構想である。毛沢東は1964年6月6日の中央工作会議で戦争準備関連の非重点扱いへの不満から否定し、余秋里計委第1副主任兼秘書長が中心とする再起案は結局「軍（事優）先」の物に成った。<sup>74)</sup> 毛の意向は庶民第一の価値順位と矛盾するものの大衆遊離・民心喪失に直結する訳が無く、現に「35計画」執行完了の70年末には彼に対する官民の擁護は盲信に等しい程であった。<sup>ひとむかし</sup>1昔の「信陽事件」では百万人以上が餓死し6万7000人の農民が政治迫害で殺害されたが、地区内の国家の食糧倉庫への強奪が1件も無く党への「愚忠」（愚昧な忠誠）を見せた。<sup>75)</sup> 毛を神の如く崇め無謬性を疑わない信仰心は「9.13」で一気に愚昧から目覚める様に成り、何故「売国賊」林彪が当初毛の後継者に成ったのかと国民的な不審が湧き不信に発展した。更に72年1月10日の中央通達『粉碎林陳反党集团反革命政変の闘争（材料之二）』（林・陳反党集团の反革命政変を粉碎する闘争 [資料其の2]）に由って、林家私党集团の毛を攻撃する言論が末端の大衆まで公開され思わぬ共鳴が引き起された。

おこれるせいねん とうだいのしんのしこうてい  
「憤青」将校の『「五七一工程」紀要』の喝破：「当代秦始皇」への失望・叛逆

林立果等の議論を基に于新野空軍司令部辦公室副処長（次長）が執筆した「政変綱領」は、企図の「武（装）起義」（武装蜂起）の語呂合せて『「五七一工程」紀要』と題されている。「当代の秦始皇」打倒を目標に掲げ毛沢東暗殺の案まで練った処は民衆の度肝を抜いたが、労働者・農民・幹部・「知識青年」（中学・高校卒の青年）乃至軍人の不条理な待遇や人民の貧困に関する喝破は、人々の生活・実感に合致する処が多い為に各々の秘めた鬱憤を呼び起す起爆剤に成った。例えば「農民生活缺吃少穿」（農民の生活は衣食が足りない）や、「青年知識分子上山下郷，等於変相劳改」（青年知識人を農村に移住させるのは、形を変えた労役強制に等しい）は、僅か8字、16字で其々数億人、数千万人が居る階層の窮境を表しその苦痛を代弁している。林立果は1969年10月17日に24歳で空軍司令部辦公室副主任兼作戰部副部长に任命され、1年後に日本映画の影響で「連合艦隊」の名で私党集团を結成し「司令官」<sup>コマンダー</sup>を自任した<sup>76)</sup>が、山本五十六気取りの真似は不吉にも彼の海軍大将と同じ海外での不意の墜落死に終った。数人の少壮将校が編み出した政変・領袖暗殺の計画概要は見戯・戯言の印象を免れないが、『紀要』の現状分析と体制批判の「憤青」情緒は「憤情」の共鳴を博す説得力が十分有る。

億万の人々が接した時に感じ且つ流露できない衝撃は静電気に由る火花放電の様であり、電荷が蓄えられている帯電状態での摩擦等が起した放電は生命機能への影響が少ないが、電流が小さいものの一瞬吃驚させられる様な鋭い刺激が全身を走る震撼力を持つ物である。<sup>びっくり</sup>瓦斯抜き

が許されず只管<sup>ひたすら</sup>負荷が溜<sup>たま</sup>っている緊張の中で人々の神経は麻痺に成っていたが、この些細な「感電」に触発されて我に返り改めて社会を見詰め考え直す人が相当多かった。日本人が特に恐れを成す雷も雲に蓄えてある静電気によって引き起される放電現象であり、静電気は可燃性液体・気体や火薬を扱う処で火花放電が起ると引火に由る爆発や火災に成り得、相手の急所を衝く『「五七一工程」紀要』の短い言葉の「寸鉄殺人」の怪力<sup>かいりき</sup>と通じ合う。「親父」毛沢東は「中傷」の拡散に対する政治局成員の懸念を顧みず末端への周知を命じたが、過信・慢心に由る愚拳は「裸の王様」の自己客観化した認識の欠落に大きな原因が有る。但し彼が開示の理由とした「この資料が一番重要」という見方<sup>77</sup>は歴史に証明されており、その時代を経験した人々の記憶及び伝承によって深遠な影響を残して行くのは間違い無い。

中央通達で『紀要』が転送される日に毛沢東は4日前に病歿した陳毅の追悼会に出席し、その「文革」への不満に由り自ら冷遇を決めた長年の戦友・詩友（歿年70）を顕彰した。翌日『人民日報』の1面で大々的に報じられたこの挙動は「老（古参）幹部」にとって、打倒・批判されている身が「解放」（放免）・「平反」（名誉回復）に成る兆しの様に映った。毛はこの信号<sup>シグナル</sup>を送る為に開始の1時間余り前に臨時に出席を思い立ち病床から駆け付け、支度もせず厳寒を冒して急遽外出した故に病状が急変し33日後の一時重体の要因と成った。<sup>78</sup>『「五七一工程」紀要』は農民・紅衛兵・「知識青年」・役人・労働者の受難を列挙する前に、「党内長期闘争和文化大革命中被排斥和打撃の高級幹部敢怒不敢言」（党内の長期に亘る闘争と「文化大革命」の中で排除・打撃を受けた高級幹部たちは、心中では怒っているが口に出して言う勇気が無い）、と真先に述べている。「高級中上層幹部不服、不満、並且握有兵権」（高級・中上層の幹部は不服・不満を抱き、且つ兵権を握っている）という指摘は、毛が老体に鞭を打ち病体悪化の代償を払ってでも行った信頼回復の努力への理解に役立つ。于新野は2人の「連合艦隊」の戦友と一緒にヘリコプターを乗っ取って国外逃亡を図り、操縦士<sup>パイロット</sup>の抵抗で緊急着陸した後に周宇馳（空軍司令部辦公室副主任、36）と共に自殺した。林立果の秘書役に当る彼は事変後の断罪の時から今まで年齢・経歴が未公表の儘であるが、誤字・脱字が多い走り書きの『紀要』は死後「生ける屍<sup>しかばね</sup>」と化しつつある毛を走らせた。

于・周が自殺した北京市怀柔県の地名に暗合する怀柔策を高級幹部に対して施した後は、1973年4月25日に李慶霖（福建省莆田県近郊の人民公社の小学教員）の嘆願書に返信し、「政変綱領」で槍玉に挙げられた農民と「知識青年」の深刻な状況の改善に動き出した。57年に「右派分子」としてこの学校に左遷された李は72年12月22日に毛への手紙で、農村に向いた息子の食糧難・収入<sup>ゼロ</sup>零等の困窮と自分の負担を訴え理解と善処を懇願した。「呼天天不応、叫地地不靈」（天に呼び掛けども天は応じず、地に叫びども地にその効無し）という窮状の中で、「告御状」（皇帝〔転じて、領袖〕に直訴する）しか無いことを許して欲しいと結んでいる。農村出身・教員経験者の毛は43歳の父親の切実な陳情に心が揺さぶられた余り涙を流し、「非常

に好く書けている」と評したこの手紙を数ヶ月の間に手元に置き「3回半」読んだ。書く決心が漸く付いたと言う返信の宛名の「李慶霖同志」と日付との間の本文は、「寄上三百元，聊補無米之炊。全国此類事甚多，容当統籌解決。」（300元を送金し，聊かでも米無しの炊事の足しにして頂きます。全国でこれに似た事は相当多く，当然全般的に解決すべきです）と為っている。<sup>79)</sup> 農民を苦しませる衣食の不足と「知識青年」に対する形を変えた「労働改造」の実態は、「6.10」中央通達で農村の末端まで転送された両者の手紙に由って確認されたわけである。

「知識青年は農村へ行くよう」という毛の呼び掛けが『人民日報』に掲載された日は，李慶霖が請願の書簡を認めた日の恰度4年前と11中3中総会閉幕の恰度10年前に当る。「上山下郷」運動は国が300億元を使って若者・親・農民の3方の不満を買ったものだ，という鄧小平の1978年11月の辛辣な総括<sup>80)</sup>はこの荒唐無稽な「革命」実験の終了を告げた。農村・山村の「知識青年」は途中で李・毛の往復書簡の御蔭で処遇が少し好く成ったが，延べ1623万人の若者とその家族・関係者等が蒙った物心両面の損害は簡単に消えまい。毛沢東が国語教科書に入れても可いとまで褒めた<sup>81)</sup>李の手紙は真情に満ちて感動的であり，毛の返信も「巧婦難為無米之炊」（賢い嫁も米が無いとご飯を炊けない。無い袖は振れぬ）という諺を生かし，理解・同情・決意等を込めた24文字は無数の当事者・関係者の感嘆・歓声・感涙を誘った。李の月給（42.5元<sup>82)</sup>）の7倍に相当する援助金は寒村の「知青」には可也の巨額であるが，「文革」と同じ10年間続いた毛の「浪漫」はこの1億倍にも上る壮大な浪費と言えよう。千万元は有ろうその頃の個人資産<sup>83)</sup>の中の300元は「九牛一毛」の形容にも当て嵌まるが，『孟子・尽心章句上』の「拔一毛而利天下」（一毛を抜きて天下を利する）に因んで言えば，毛の「一毛」（髪の毛1本）の様な寸志・寸言は天下を動かす絶大な影響力を持つのである。毛の言葉は「1句頂1万句」（1言は1万言に匹敵する）という林彪の贅辞は毛に嫌われた<sup>84)</sup>が，毛の鶴の一声は紛れも無く他の人の1万言や1万人の1言の総和よりも効き目が大きい。それだけに李の手紙を4ヶ月放置し返信の末端組織への下達が更に1ヶ月半遅れたのは，長い間1言も発さない人で吝嗇の様に言う「一毛不拔」（1本の毛も抜かない）の感が有る。

毛沢東が中共要人の葬式に参列する事は建国後3回しか無く陳毅の場合が最後と成ったが，電光石火の様な予定外行動は意外の驚きを以て高級幹部の不満を和らげる即効力が有る。同日に下達された『「五七一工程」紀要』の当該部分はこの解毒剤で殺傷力が落ちたが，農民・「知識青年」の件に対する彼の「消毒」は悠長にも1年と数ヶ月後に始めて為され，発信（中国語では手紙を出すの意）の逸機で「流毒」（害毒）は一層定着・増殖していった。「無以先入之語為主」（先入の語を以て主と為す無かれ）と『漢書・息夫躬』の警句は言うが，否定形でない熟語の「先入為主」（先に耳/頭に入った言葉/考えが主たる地位を占める）は，「話語権」や発信「制高点」の争奪の必要性と為る先入観の排他的な支配力を思わせる。『紀要』の「反動（的）言論」は大衆の言わば「革命疲れ」故の反動と通底する処が多く，当局の断罪や「予防注射」

もその「一拍即合」（双方が簡単に一致する）の下地を壊せない。この4字熟語の「手拍子をすれば直ぐ曲の旋律に合う」という原義の中の「手拍子」は、日本語では囲碁・将棋等で深く考えずに弾みで手を下すことに言う（中国語＝「随手棋」）。毛は1936年12月の講演『中国革命戦争の戦略問題』（中国の革命戦争の戦略の問題）の中で、囲碁・将棋に譬えて「一着不慎，満盤皆輸」（迂闊に1手を打ち/指し間違えると全局が負けて了う）と述べた。大勢を決める行動の重大さを論ずる比喩であり全局に決定的な影響が無い場合は別なので、『紀要』転送の判断過誤は「文革」全体の大罪に比べれば語るに足りないのかも知れない。但し興味深い事に、この手は「悪手が悪手を呼ぶ」という囲碁・将棋の格言の2重の意味を体現している。稚拙な「政変綱領」に引き摺り回されたのは相手の悪手に釣られて悪手を打つことに当り、責任逃れの為の窮余の1策は自分の悪手が祟って更に悪手を放つ焦りの悪循環である。

毛沢東は1969年3月に中ソ国境で起きた軍事衝突を受けて様々な手で対米接近を追求し、71年4月6日に名古屋で卓球世界選手権大会に参加した米国選手団を招くことを決めた。招待は時期尚早とする外交部・国家体育委員会の請訓報告書を一旦「圈閲」で承認した後、就眠前の朦朧状態の中で突如変心して看護婦長に外交部へ最新決定を伝えるよう命じた。不眠症で睡眠薬を大量に服んだ後なので自ら決めた規則では指示は無効のはずであるが、彼は1瞬の好機を逃すまい一心で睡魔と闘いながら渾身の力を振り絞って対応を催促した。<sup>85)</sup> 帰国直前の米代表の中国訪問の実現に対して米国は14日に対中貿易禁止令の解除で応え、同日に周恩来は米代表一行との懇談で両国人民の友好往来の扉が開けられたと宣言した。69年12月3日に駐波蘭大使がユーゴスラビアのファッション展で中国の外交官を掴まえて、ニクソン大統領は中国の指導者と会談する用意が有ると重要な意思表示を伝えた。当夜毛に報告した周はこの動きを「拿到敲門磚了」（門を敲く煉瓦を手に入れた。扉を開く手掛りが掴めた）と評し、双方の「一拍即合」で中米大使級会談（於・ワルシャワ）は翌月に3年近く振り再開した。<sup>86)</sup> 70年3月の柬埔寨政変と4月の米軍・南越軍の同国侵攻に由って会談は再び中断したが、翌年3月28日～4月7日の世界選手権大会への「卓球王国」の復帰で又「敲門磚」が転がって来た。4月4日に米国のコーワン選手が誤って中国選手団の専用バスに搭乗した事が発端と成り、元世界王者の莊則棟が記念品を贈り翌日に返礼が有ったという報道が毛の注目を引いた。偶発の出来事を糸口に「乒乓外交」の妙手を放ったのは彼一流の嗅覚の賜物であるが、結果的に好かったこの1幕の美談の裏に蔽われ勝ちの「病夫独裁」の放恣も看過できない。

外交部・国家体委の判断と周恩来及び自身の了解を1言で覆したのは正に独裁であり、婦長が懸念した理性の健全度の問題も有り相当の危険性を孕んだ挙動と言わざるを得ない。半年後の10月8日に毛はハイレ・セラシエ1世（エチオピア帝国の末代の皇帝）に対して、自分は数週間前に心臓病で1度死に又あの世から生き返って来たと重病の実態を吐露した。<sup>87)</sup> 林彪一味への包圍網を作る為の南方視察（8.15～9.12）の途中も前も重病が無かったので、時期未詳

の死との異常接近は「南巡」終了日に起きた林彪事変の衝撃に由る事と思われる。<sup>88)</sup> 前年の第9期2中総会で林彪・陳伯達等を相手に繰り広げた熾烈な政争は健康を酷く損ね、林も同じ1970年の「5.21」首都群衆50万人大会で毛の「米帝」反対の声明を代読する際、病弱の身を元氣付ける特殊な薬物注射の所為で支離滅裂の処が幾つか有り醜態を曝した。共産党と一卵性双生児の様な共通性が色々有る国民党の蒋介石総裁も69年9月16日に、部下の師団長の専用自動車の反則運転で引き起された交通事故で治らない後遺症を負い、72年1月に病状が悪化し以後大きく回復すること無く75年4月5日に死去した(歿年87)。<sup>89)</sup> 72年には1月に毛が弔問した陳毅は直腸癌で70歳の人生を終え周恩来も膀胱癌を患ったが、翌月の毛の危篤で顕著に成った「病夫治国」の元年は「9.13」頃が起点である様に思える。

林彪亡命の劇変の後に倒れた毛は漸く翌月8日に外賓と会見できる様に持ち直したが、興味深い事に相手は20世紀の独裁者執政の最長記録保持者(1930.11.2～74.9.12)である。セラシエは73年に宮中に飼育しているペットライオンに肉を与えている写真が発表された事で、食糧難に苦しむ国民の激憤を招き同年に未遂政変が起り翌年に政変(9.2)で廢位された。対照的に毛は59年後半から3年続く大飢饉の中で暫く肉を食べないと宣言し人心を得た<sup>90)</sup>が、同時に1億元もの公金を投じて故郷に自分専用の別荘を建てさせた事<sup>91)</sup>は誰も知らなかった。林彪が亡命に踏み切った日の2年後に倒されたセラシエは毛より1歳年上の1892年生れで、生誕の「7.23」は19年後の中共「1大」開幕日なので訪中の年の建党50周年を連想させる。毛は満50歳に成る9ヵ月余り前の1943年3月20日の政治局会議(於・陝西省延安)で、政治局・書記処の主席に当選され名実俱に党の主の席に着き以来1/3世紀も君臨し続けた。71年「7.1党慶」で中共は「五十而知天命」(50にして天命を知る)の節目を迎える前に、満49歳を過ぎて間も無く党史上未曾有の中央総会での組織的な「反乱」活動が勃発した。林彪は陳伯達と政治局員の呉法憲(空軍司令官)・李作鵬(海軍第1政治委員)・邱会作(総後勤部部長)等を操って、各分科会で張春橋(元「中央文革」副組長、上海市革命委员会主任)への攻撃を仕掛け、極左の觀念形態で毛の眼鏡に適い次の後継者とも目された張を失脚寸前まで追い詰めた。多数の共鳴の下で会議の流れが変えられた事態に毛は驚愕し直ちに不定期の休会を宣言し、その後5日間周恩来等と共に反対派の切り崩しに動き漸く非暴力の「政変」を封じ込めた。<sup>92)</sup>

「他最大憂慮在表決時能占多数否」(彼の最大の憂慮は表決の時に多数を占めることが出来るか否かに在る)、という林彪が『毛主席語録』1967年版の扉に書いた随想<sup>93)</sup>は毛沢東の懸念を見抜いたが、70年晩夏～初秋の廬山会議で毛は建国後初めて最高指導部で一時絶対的な少数に成った。総会で審議する憲法修正案では劉少奇の失脚後空位と成った国家主席の復活が無いものの、開幕前日の政治局常委会では4人が民意に基づいて党主席・国家主席の1元化を主張し、煩雑な公務を嫌う為に兼務を拒み林にも渡したくないと思われる毛は独りで反対に回った。開会式では林は当初予定が無く直前に諸常委に予告した発言を1時間以上も延々と行い、毛の国

家元首としての地位を憲法で確定することを修正案の「<sup>たましい</sup>靈魂」とするよう力説した。一貫して毛に忠誠を尽す康生（元「中央文革」顧問）も林の講話に対する擁護を表明し、更に大衆の討議で毛・林の国家主席・副主席就任を望む意見が一致している事を紹介し、国家主席は若し毛が成らないなら林に務めて貰おうと林よりも踏み込んだ主張を述べた。毛は4月以来国家主席就任の意思が無く職位の復活に反対する意向を上層部で示したが、内幕を知る由も無い中央委員会の絶対大多数の<sup>メンバー</sup>成員は毛・林の正・副主席就任を熱望し、中央辦公庁機関・中央警備部隊までが憲法に於ける『国家主席』の章の復活を要請した。2日目の6大区分科会では臨時議題として林彪講話の録音を2回聴き学習・討論を行ったが、全ての分科会で講話及び国家主席の復活・毛への<sup>すいたい</sup>推戴に対する<sup>おおむ</sup>賛意は概ね総意と成った。翌日の分科会では毛の腹を知っている故に再設置に消極的な張春橋への批判が一斉に起り、一部の中央委員・委員候補は連名で毛・林に書簡を送って毛の国家主席就任を擁護した。毛の固辞を顧みず林が民意を盾に復活案に固執し側近の追放を企み又大勢を得た展開<sup>94)</sup>は、数十年も自分の権力への本格的な挑戦を受けた事が無い毛にとって青天の霹靂であった。

#### 「<sup>ちんぶ</sup>陳・<sup>ひとりよがり</sup>独秀」的な家長制集権専政：「<sup>キム</sup>金家王朝」と同質の「毛氏天下」の「先軍党治」

汪東興（政治局委員候補・中央辦公庁主任・中央警備局党委第1書記）は毛に叱られた<sup>95)</sup>が、親衛軍を司る腹心の大番頭さえ林に靡いたのは毛の老衰を見ての打算が憶測されている。<sup>96)</sup>但し、似た魂胆が感じ取れる康生の言う様に毛・林の国家正・副主席就任は国民的な合意であり、「党内民主」の準則からすれば毛は政治局常委会・中央委員会の多数派に従うべきである。中共は建党当初からレーニンが唱えた民主集中制（民主主義的な中央集権制）を採っており、初代総書記陳独秀が「1大」に出した『中国共産党綱領』草案の中の「民主集権制」を経て、「2大」（1922.7.16～23、於・上海）を始めソ連共産党式の「民主集中制」が明文化され、「7大」（45.4.23～6.11、於・延安）で採択された党規約ではこの組織機構の建設と指導の原則を、民主を基礎とする集権と集権の支配の下での民主と規定し、<sup>97)</sup> 黨員個人は党の組織に服従し、少数は多数に服従し、下級組織は上級組織に服従し、部分的な組織は中央に服従する等の基本的な条件を定めた。「8大」（56.9.15～27）の党規約では民主に対する集権の「<sup>くんだり</sup>領導」（指導・統率）を「指導」に変え、4つの「服従」の前に「<sup>くんだり</sup>必須」（必ず）と付け加え、個別組織の服従対象は中央委員会の前に全国代表大会を添えた。「9大」の修正で4番目は「全党は中央に服従する」に簡略化し、「12大」（82.9.1～11）ではこの件は「8大」に戻り、4つの「服従」を1つとする4原則を6原則に広げて、6番目として「如何なる形式の個人崇拜をも禁じる」と新たに定めた。<sup>97)</sup> 規約採択の<sup>ちやうど</sup>恰度12年前の9月6日に閉幕した第9期2中総会での毛の恣意な振舞と弊害は、全党が服従する中央は主席に服従するという個人崇拜の時代の不文律の現れに他ならない。

「全体主義」に当る中国語の「集権主義」の「集権」は「集中」の初期の用語であったが、1927年8月7日の政治局緊急会議（於・漢口）で解任された初代党首は用語の選好の様に、大権を一身に集めて人の意見を容認しない「家長制」<sup>スタイル</sup>作風が突出した独裁者の感が強く、それが我慢できない故「1大」代表の李俊漢・李達等多くの初期成員は間も無く脱党した。<sup>98)</sup> 陳の名を含む成語の「一枝独秀」は同類の物事の中で際立って優れていることに譬えるが、「百花斉放」の反対語として独占的な突出や排他的な優位の状態を形容することも出来る。現代中国語では「秀」<sup>xiù</sup>は英語の show の音訳兼意識として「表演」<sup>パフォーマンス</sup>・展示の意味も有るので、独り善がり・独演の「政治秀」<sup>ショー</sup>（劇場政治の公演）の「独秀」も陳・毛の2人に当て嵌まる。「1大」で「書記」（記録係）を務めた毛沢東が数代の総書記に次いで党首と成ったのは、空前絶後の高い人気と長い任期の秘密の1端を為す非凡な求心力・統治力の結果である。結党当初の古い（「陳」の形容詞の意味）家長制は建国後の毛沢東時代の中期から擡頭し、「文革」の10年間には反対者を肉体的な抹殺も含めて排し切る強固の頂点に達していた。珍しく毛の顔色を窺わず総会で国家主席復活と毛・林擁立を提言した康生も最後の1言で、「到底怎麼樣，請毛主席最後指示，最後定。」（一体どうするかは、最終的には毛主席に指示を仰ぎ、最終の決断をして頂きます）と語った。<sup>99)</sup> 毛沢東思想を「無比の威力を持つ精神的な原子爆弾」とした林彪の賛辞に因んで言えば、重大事項の最終決定権の「核按鈕」<sup>かくのボタン</sup>を毛に委ねる仕組みはその横暴な覇道を許してしま<sup>しま</sup>った。彼は独断に由る5日間の休会の後『我的一点意見』（私の僅かな意見）と題する訓示を書き、僅か700字ぐらい<sup>100)</sup>の陳伯達批判を以て党内序列4位の「裏切り者」の政治生命を葬った。陳は職務を解かれぬ儘で閉幕の翌月に拘禁され翌年「9.13」に秦城監獄に移送された<sup>101)</sup>が、要人専用の刑務所で悪劣な独房に入れられた事に危険を感じた彼は命乞いの絶叫をした。国民党軍の爆撃から毛の命を救った手柄を暗示することで忽ち優遇される様に成った<sup>102)</sup>ので、恩義の「資本」と自助の機転が無ければ恐懼の通り命を奪われかねなかったのであろう。

「9大」直後の1969年4月30日に毛沢東は周恩来・陳伯達の経済優先志向を却下し、林彪は陳との電話で毛はスターリンよりも独裁的で国に災難を齎<sup>もたら</sup>す事に成ると言った。<sup>103)</sup> 2年後の国際労働節の首都群衆花火大会で林は異例の遅刻・早退で毛への不快を表した<sup>104)</sup>が、半月余り後に毛宛の「4不1要」（4つの「せず」・1つの「べき」）提言の書簡を口述した。政治局委員・委員候補中の大軍区の「第一把手、第二把手」（序列1位、2位の司令官、政治委員）に対して、「不逮捕、不関押、不殺、不撤職」（逮捕せず、監禁せず、殺害せず、解任せず）の保障を与えるよう要請し、又「遇特殊情况，要執行主席面授的機動指示」（特殊な状況が生じた時は、主席が直々に下さる臨機応変の口頭指示を執行する）と付け加えた。<sup>105)</sup> 4月15～29日に中央が召集した「批陳整風滙報会」（陳伯達批判・作風整頓報告会）で、林派「4大金剛」（総參謀長黄永勝と呉法憲・李作鵬・邱会作）と葉群が自己反省を強いられた事で、一部の高級将領の政治生命乃至人身安全に深い憂慮を抱いたのが林の建議の動機である。軍委辦事組（執行部に準

じる事務局)の多数を固めた黄・呉・葉・李・邱には言及せず、政治局中の大軍区責任者のみを優遇対象とするのは癒着の嫌疑を避ける策略だと思われる。該当の委員の許世友・陳錫聯と候補委員の李徳生（南京・瀋陽・北京3軍区の司令官〔其々55.3、59.10、71.1就任〕）は、林派に属さず毛の意向で政治局入りし以後異動が有るものの大軍区司令官の職は全うした。対して林の真の懸念は「9.13」の11日後の「4大金剛」解任・逮捕・監禁で現実に成り、林・葉夫妻の変死と合せて21人の政治局委員中の6人は「黒い9月」に一挙に破滅した。

前年9月の陳伯達失脚を含めて1/3の政治局委員は当選の翌年・翌々年に粛清されたが、政治局委員中の林派は毛派（毛・江青夫妻と康生と張春橋・姚文元・謝富治）よりも多い。21人の中に1955年「軍銜」（軍の階級）制度設立当初授与された現役軍人は12人も居り（林彪・朱徳・劉伯承・葉劍英元帥、黄永勝・許世友・陳錫聯・謝富治上將、呉法憲・李作鵬・邱会作中將、葉群大佐）、委員候補の4人の中でも半数を占めた（李徳生・汪東興少將）。更に軍委主席の毛と建国前の軍委副主席で「9.13」の際に毛の委託で軍を指揮した周恩来、國務院副總理就任（54.9～80.9、5期連続）の為に授与されなかった元軍高官の李先念委員、党の要職に専念すべく授与対象から外れた元軍政治工作幹部の李雪峰委員候補も入れれば、25人中の7割強も軍人又は軍人出身者であり建国後唯一軍人が過半数の構成と成っている。軍歴の無い張春橋も南京軍区第1政治委員を兼務する故に広い意味の軍関係者に当るが、理論上「4不」の配慮対象に入る彼は林が倒そうとして倒せなかった「宮廷派」文官である。張に矛先を向けた林の開会式での講話は「文革派」に対する人々の憎悪と「一拍即合」で、葉劍英・陳錫聯・許世友と陳毅等は感激の余り散会の際に林に握手を求め講話を激賞し、李先念や陳毅と同じ政治局委員経験者の陳雲<sup>じょう しん</sup>・聶榮臻元帥等も討議で林の講話を支持した。<sup>106</sup> 毛は林の1時間半も続く一世一代の熱弁と康生の同調に苛立ち不機嫌に散会を宣言したが、大演説に万雷の拍手を送った人々は「戦勝」の上機嫌の余韻に浸り会場は熱気に包まれた。<sup>107</sup> 76年2月に毛が葉劍英副主席に代って軍委の運営を命じた陳錫聯も非「文革派」なので、政治局内の極左集団は毛死後の失脚に対する全員の歓迎が示した様に相当孤立していた。

毛は南京軍区副司令官・安徽省革命委员会主任李徳生を政治局委員候補に抜擢した後、解放軍総政治部主任（1970.4～73.12）と北京軍区司令官（71.1～73.12）の重任を与え、第10期1中総会（73.8.30）で副主席（周・王洪文・康・葉に次ぐ末席）に3段跳び特進させた。副主席中2/5を占める葉・李が陳錫聯・許世友・李先念と共に第9期政治局に入ったのは、紅軍第4方面軍の出身者を以て第1方面軍の林・「4大金剛」と均衡を取る目論見が有ろう。59年廬山会議後に公安部長から総參謀長・軍委秘書長に転任した羅瑞卿の後任として、毛は中央から提案され候補者の楊成武・楊勇・張際春・張宗遜を否定し謝富治を推した。政治局の審議を要請する振りでの事実上の決定は交代（9.17）後に色々な論議を呼んだが、公安の仕事は大変重要であるとは言え何時も1方面軍ばかりから人を出す訳<sup>わけ</sup>には行かず、謝は4方面軍の出身ながら

党への忠誠心が歴史の試練で証明されていると毛は弁護した。<sup>108)</sup> 副総参謀長楊成武上将・副総参謀長兼北京軍区司令官(楊成武に次ぐ2代目)楊勇上将・國務院文教辦公室主任張際春・副総参謀長張宗遜上将は、母体が全て1方面軍(張宗遜だけ後に4方面軍に転出)なので「第1」の優位を思わせる。毛は70年8月29日に黄永勝を叱る時1方面軍の幹部は4方面軍の幹部に及ばないと言った<sup>109)</sup>が、彼が肯定した後者の憤り深さは当軍総帥張国燾の反党行為に由る後ろ目痛さが根底と為る。「10大元帥」中第3位の林彪は軍事指揮の才能と戦功に於いて「一枝独秀」の観が有り、「解放戦争」で率いた第4野戦軍の突出した殊勲に由り林派将領の自負・威勢も可也強い。「驕兵必敗」(驕る兵は必ず敗る)という『漢書・魏相丙吉伝』の警句は此処でも適用し、「一人之下、万人之上」(1人[天子]の下、万人の上)の高位に居た総帥の滅亡の激震で、忽ち諸「金剛」と関連の将校も失脚し果てには「4野」閥は余震で瓦解する破目と成った。対照的に、「歴史上の過誤」に由る「連帯的な負罪感(罪悪感)」「造語)を負わされた2方面軍系統は、「小心駛得万年船」(慎重に漕げれば船は1万年も沈まない。安全運転すれば永久に転落しない)という俗諺を体現する様に、「敗者復活」組特有の悲壮な発憤と慎重な世渡りの御蔭で急上昇乃至逆転を果したのである。

毛沢東は自らの意思で1966年5月27日に立ち上げた「中央文革」に絶大の権限を与え、翌年「2月逆流」批判を経て政治局に取って代える権力機構の主体に同「小組」を据えた<sup>110)</sup>が、「9大」の直前に秩序の正常化に伴う再構築としてその自然消滅と常委会の復活を指示した。<sup>111)</sup> 劉少奇打倒の為に借りた林派の勢力の膨脹は「9大」後「文革派」乃至毛への脅威に化し、「尾大不掉」(尾が大き過ぎて振れない。転じて、局部の勢力が大き過ぎて制御できない)の程と成った故に、67年9月24日に林の主導で設立した軍委辦事組も「9.13」の翌年の10月3日に解散された。「造反」の狂乱や準戦時状態の中の上層部権力構造の超法規性や不均衡に対する是正は、突き詰めれば現代流で言う「億万人」の上に立つ「君主」に由る権力再分配に他ならない。廬山会議で争点と成った国家主席の職位は54年9月の設置時に当然の如く毛が就任したが、国事行為の負担や失政等が原因で59年4月に劉少奇に譲った後は「文革」で劉を打倒した。自ら起草を指導した憲法で国家の最高意思決定機構と為る全人代は8年余りも機能せず、国家主席は法的な手続きも無い儘66年8月から職務を停止され翌年9月から拘禁された。68年10月13～31日に開かれた第8期12中総会(拡大)で劉に対する処分が下されたが、党籍の永久剥奪と共に宣言された党内外の全公職の追放は1党独裁ならでの決定であり、立法・行政・司法3権を凌駕し続けた上で憲法まで殴り捨てた職権濫用は言語道断である。

「党紀国法」(党の紀律・国の法律)という熟語の順番にも現れる共産党の優位に由って、中共治下の共和国は「執政党」(与党)至上の「先党」(「先軍」に擬えた造語)の感が強く、1党独裁下の「民国」を長年「党国」と称し続けた国民党政権とは五十歩百歩の様に思える。「文革」の最初の4年間の「君主(毛)廢憲」状態(「君主立憲制」を振った造語)の中で、国家主席

は「名存実亡」（名目だけは残り実態が無い）以上に名称さえ形骸化に成ったが、同じ毛の固執の結果1970年の憲法改正から8年後の再改正までは名実俱に亡びてしまった。林彪は「名不正則言不順」（名正しくなければ則ち言順わず）という孔子の論理を引いて、元首の無い国家の不健全さを指摘し国家主席の設置を新憲法で改めて定めるよう主張した。<sup>112)</sup> 毛は林の就任を警戒し「不要因人設事」（[特定の]人[や人間関係]を考慮して[不必要な]部署[職位]を設置しては成らない）と一喝した<sup>113)</sup> が、彼の「因人廢位」（上記4字に因んだ造語、人に因って職位を廢するの意）こそ罪が深い。毛は70年12月18日に旧友のエドガー・スノー（米国ジャーナリスト・作家）の取材に対して、「4個“偉大”」への嫌悪の吐露で林彪を敲き又自分の性格を「無法無天」と言い表した。<sup>114)</sup> ブッシュ政権の2002年度『米国の安全保障戦略』で北朝鮮等7カ国が指名された「無頼国家」とは違うが、毛の人治の下の中国はその「無頼派」的な自称の通り「無法国家」の様相を呈していた。毛は66年8月、翌年1月に党内序列2位、4位だった劉少奇、陶鑄を相継いで失脚させ、2人は69年11月12、30日に河南開封、安徽合肥の監禁先で虐待死を遂げた（歿年70、61）。毛は65年暮れに劉と会議で激論を交した後「小指1本でお前を倒せる」と暴言を放った<sup>115)</sup> が、後に4位の陳伯達、2位の林彪の政治生命を断つ絶大の力も軍を掌握し切った所以である。

朝鮮労働党・朝鮮民主主義人民共和国を創設した金日成の逝去（1994.7.8, 歿年82）後、長男金正日は97年10月8日に党中央総書記に成り翌年9月5日に国防委員長に就任した。『朝鮮民主主義人民共和国社会主義憲法』（72.12.27採択）に由って設置された国防委員会は、当初の「国家主権の最高指導機関」中央人民委員会に従属する部門（国家主席兼任）から、最高人民会議第9期第1回会議（90.5.24）で中人委よりも上位の独立機関に格上げされた。92年4月9日の改憲で国家主席に由る兼任の規定が消され翌年の同日に金正日が就任し、建国（48.9.9）50周年の4日前の最高人民会議第10期第1回会議では中人委を廃止する一方、改正憲法で対外的な元首とされた最高人民会議常任委員長等の国家重役の選出に先立って、2世領袖の彼をこの「国家主権の最高軍事指導機関」（憲法の規定）の委員長に再選出した。直後に最高人民会議常任委員長に当選された金永南（政治局委員・副総理兼外相）は金正日を推戴する演説の中で、国防委員長を政治・軍事・経済力の全般を建設・指揮する「国家の最高職責」と宣言した。建国60周年の前日の慶祝中央報告大会で発表された『偉大な指導者金正日同志に捧げる祝賀文』の連名機関では、「国家領導體系の中樞」と表現された国防委は党中央・中央軍委と最高人民会議常任委員会・内閣の間に位置付けられ、翌2009年「4.9改憲」では国防委員長の「国家の最高指導者」としての地位が明記された。金日成父子2世代の何れも末期頃に行われ恰度17年間隔たった2回の憲法改正に由って、又「国父」死去の前年の同じ4月9日の金正日の国防委員長就任を経て、統帥が元首と成り領袖・統帥が一体化する軍事独裁体制への「昇級」が着々と進められた。

露西亜「10月革命」(1917.11.7 [ユリウス暦 = 10.25])の蜂起で社会主義政権が立ち上がり、翌年の全露西亜第3回労働者・兵士代表ソビエト大会(1.23 ~ 31)で初の社会主義国家が成立し、その露西亜社会主義連邦ソビエト共和国を母体とするソビエト社会主義共和国連邦は22年12月30日に樹立した。「暴力は新しい社会を孕む全ての旧い社会の産婆である」というマルクスの論断を体現して、社会主義政権・国家の誕生は常に暴力革命の起爆剤を必要とし「先軍」の傾向も免れない。この命題が見える『資本論』(1867 ~ 94)第1巻(第7篇第24章第6節)の初刊の50年後、露西亜社会民主労働党(1898年3月13日結成)第6回全党協議会(1912.1.18, 於・プラハ)で分派したポリシェビキの指揮下の暴動で、人類史上初めて共産主義勢力が政権を奪取し社会主義国家乃至共産圏陣営の誕生を導いた。『経済学批判』を副題とする共産主義の教典は著者存命中に3巻中の第1巻だけが出たが、その逝去(1883.3.14)後の第3版に寄せたエンゲルスの序文の日付(同年11月7日)は、34年後に露西亜「2月革命」で発足した立憲民主党政導の臨時政府を倒す政変クーデターの日になった。ソ連共産党の前身はマルクス15周忌を挟む13 ~ 15日の大会で創設したのは巡り合せて、初の社会主義国家が産声を上げたのはマルクス生誕100周年(18.5.5)の94日前に当たるが、『資本論』が世に問う100年後の中国では「文革」の武闘の「全面内戦」が頂点に達した。「天下大乱」を煽動した毛沢東は視察先の武漢で軍内2派激突の「7.20事変」に遭遇し、安全の考慮で中央から利用を禁じられた飛行機で慌てて脱出し翌日から上海に避難した。『資本論』第1巻序文完結(67.7.25)の恰度100年後に武漢軍区党委への返電を起草し、林彪・江青等が「政変の首謀者」として陳再道司令官(上将)に就いて寛恕の意を示した。<sup>116)</sup>初刊(9.14)100周年の2日後に彼は杭州→南昌→長沙→武漢→鄭州経由の帰京の途に着き、道中の談話で幹部への迫害を批判し翌年に「文革」を終え「9大」を開く計画を披露した。<sup>117)</sup>中国語の定訳で「暴力=助産婆」と為る件の命題は日本語では「強力=助産婦」も有る<sup>118)</sup>が、自ら強暴の脅威を喫した事で毛は無軌道の暴力から秩序有る強力への転換を図り始めた。

来秋9月頃、遅くとも再来年1月という時期まで示した党大会は1969年4月に開かれたが、「8大」の12年半後の開催は党の最高意思決定機関の機能正常化への転換を意味する。「6大」(28.6.18 ~ 7.11, 於・モスクワ)から「7大」までは戦争の為に17年近くも掛り、「7大」 ~ 「8大」の11年余りも同じ対内・外の戦争及び政争に由って伸びた結果である。「9大」→「10大」→「11大」の4年と4ヵ月、4年は林彪事変と毛沢東死去の影響が有り、「11大」の5年後の「12大」から最後の桁が2、7と為る西暦年の秋の開催が定着した。「20大」開催予定の2022年は建党101周年なので平均間隔は理想的な5年に回帰するが、同年が成立100周年に当るソ連の与党の党大会の間隔は党の寿命と同じく中共を下回る。1918年3月6 ~ 8日の第7回党大会でポリシェビキから改称した露西亜共産党は、25年に「全連邦共産党」を名乗り52年に「ソ連共産党」と成ったが、長い歴史を締め括る最後の党大会は解党(91.12.13)前年の「28大」(90.7.2

～13）である。ソ共党大会は露西亜社会民主労働党創設を初回とし<sup>119)</sup> 92年中の開催頻度は平均3.3年に成るが、スターリン批判・路線転換で有名な「20大」（56.2.14～25）との間の平均年数の4.25は、ソ共が攻撃した毛沢東時代後期の「9大」と死後の「11大」との間の同4.17年と妙に近い。ソ共と違って中共は「20大」に成っても建国後の初代独裁党首を敬い続けるであろうが、毛の指名に由る最後の後継者が仕切った「11大」（77.8.12～18）の開会・閉会の時機には、大会での「文革」終結宣言とは裏腹に毛への「情結」（愛憎混合の感情・葛藤）が見られる。「10大」の8月下旬と同じく8月中旬の開催も史上初で独特の理由が有ったはずであるが、「8.18」は11年前の同日の毛及び中央首長等の「第1次接見紅衛兵」を容易に連想させ、「8.12」も「文革元年」のその直前の第8期11中総会（66.8.1～12）の最終日と重なる。

「文革」発動（5.16）の77日後に当る総会1日目の「8.1」は建軍39周年記念日であり、総会では最後に林彪のNo.2への昇格、劉少奇のNo.8への降格等の異動が決められたので、この日は設定の意図に関らず軍の支持で党内政変を強行する毛沢東の先制攻撃と暗合する。「8.1建軍節」は便宜上の「7.1党慶」と同じ真夏の月の初日である点で通じるだけでなく、実際に1921年7月23日に開幕した「1大」の定説が無い閉幕日と重なる可能性が高い。未だ暴力又は強力という名の産婆が付いていない中共は敵の密偵の騷擾で「難産」に陥り、緊急休会（7.30）後嘉興に移って続行した「1大」の閉幕日も党史に多い謎の1つと成った。開幕日を割り出した邵維正は5人の代表や第2会場の手配者の回想を基に「7.31」とし、中共中央党史研究室編『中共党史大事年表』81年版でも「7.23開幕」と共にこの説を採った。他方、董必武（上記5人中の1人）・張国燾・陳公博3代表等の記述に基づいた「8.1」説や、陳・李達（同5人中の1人）・張の別の記述等に対する分析で得た「8.2」説、李・陳の他の証言とソ連の関係者の早期（21.10.13）の記述に拠る「8.5」説も有る。「7.23開幕」説が発表・確定された80年にソ連では「7.23～8.5」の会期が定説と成ったが、『中共党史大事年表』87年版では「8月初」と修正し脚注で1日か2日であると記した。<sup>120)</sup>「7.23」を突き止めた邵の「7.31」説は5人の代表の証言が有るのに誤認と判断されたが、董の記述が「7.31」「8.1」「8.2」の3説で引かれているから当事者の記憶も不確かである。この3説の何れかが真実であるなら第8期11中総会の開幕日と時間的な連環に成るので、図らずも「1大」閉幕日と繋がった事は党史の神秘さと党・軍一体の伝統の長さを思わせる。日本語の「統治」との同音に因んだ「先軍党治」が「先軍・党治」と形を取らないのも、軍を天下取りの先導とし党が軍・国を治める一心同体の関係をこの造語で表す訳である。

「8.5」説が認定されなかったのは域外の証拠・定説を採用しない意地の為ではなかろうが、エンゲルスの命日（1820.11.28～95.8.5）に当る事は11中総会で特別な意味を持って来る。露西亜共産党誕生の70年前の『共産党宣言』を共著した彼の国際共産主義運動の指導者は、軍事に通暁した「將軍」（マルクスからの尊称）として運動の「先軍」遺伝子を感じさせる。『共

産党宣言』刊行 124 周年の日に中国の土を踏み毛と会見したニクソン大統領は 6 日後に、上海工業展覧会への参観でマルクス・エンゲルス・レーニン・スターリンの肖像を見た時、中共が崇める国際共産主義運動の 4 領袖の中のエンゲルスの写真は米国で余り見掛けなれないと言った。<sup>121)</sup> 毛沢東時代以来常にマルクスと並べられて来たエンゲルスは思想的な領袖ではないものの、『資本論』第 2、3 巻の編集や著者への資金援助や等でマルクス主義への貢献は絶大である。理論家のマルクスと実務家のエンゲルスの 1 対は毛沢東-周恩来の 2 人組<sup>コンビ</sup>を連想させるが、工場を経営したエンゲルスの経済分野の能力は毛が周に依存した大きな原因である反面、その軍事分野の著述の豊富さは毛の自慢でもあり内外から尊敬され続けた理由にも入る。彼は朝鮮戦争の第 3 次戦役 (1950.12.31 ~ 51.1.8) が中・朝軍の漢城・仁川<sup>ソウル インチョン</sup>占領で終わった後、2 月末~3 月初めに河北省石家庄で秘書等と共に『毛沢東選集』第 1~3 巻の編集に没頭し、その結果 51 年 10 月 12 日 (初版 166 万冊)、52 年 4 月 10 日、53 年 4 月 10 日に順次刊行された。<sup>122)</sup> 解放戦争中の著作を収録する第 4 巻の本文は 60 年 2 月 27 日~3 月 8 日に広州で校閲され、鄧小平の主導で出来た解題・注釈も 5 月 24 日~6 月 2 日に杭州で毛の審査を経て確定した。彼は「5.22」政治局常委拡大会議で前の 3 巻には余り興味が無いという誇張の言葉を以て、対敵闘争・戦勝の記録と為り自らの才智が存分に発揮されたこの巻に対する偏愛を語った。<sup>123)</sup> 「3 年内戦」(「第 2 次国内革命戦争」の別称「10 年内戦」に因んだ名称)の苦闘と勝利は、彼の自賛や林彪・鄧小平等の「軍先開国」元勳の自負の資本と成るのも然るべき事である。

### 全民飢饉中の領袖「断肉」の伝説の虚実：「禁欲の垂範」とは裏腹の禁域の特権

『毛沢東伝 (1949—1976)』第 25 章『廬山会議後の一年四個月 (上)』の最後に、上記の経緯に続いて 9 月の刊行に由って「学習熱潮」(学習の熱<sup>ブーム</sup>)が起きたと記してある。<sup>124)</sup> 直前の部分は 1 月 7~17 日の政治局拡大会議 (於・上海) の「大躍進」継続の決定であり、59 年冬と翌春は経済分野の「左」傾蛮干 (急進的な妄動) の最も酷い時期とされている。<sup>125)</sup> 建国前の毛の最も重要な著作の選集が出揃った時機は建国後空前の大飢饉<sup>さなか</sup>の最中に在り、「精神食糧」(精神の糧<sup>かて</sup>)に対する本人の満悦と対照的に各地で餓死者がまだ続出していた。次章『廬山会議後の一年四個月 (下)』に拠ると毛は正に 10 月に農村での大量餓死を聞き、衝撃と心痛の余り同月から節約及び輸出に由る外貨獲得の為の肉食自粛を始めたと言う。<sup>126)</sup> それで大柄の毛の体重が 75<sup>キ</sup>まで落ちたという看護婦長呉旭君の回想は美談に成った<sup>127)</sup> が、当時の推定身長 1.76~1.77<sup>メートル</sup><sup>128)</sup> を基準にする適正体重 (身長 [m] × 身長 × 22) は 68~69<sup>キ</sup>で、高上げされた伝説の 1.83<sup>メートル</sup><sup>129)</sup> にしても 73.7<sup>キ</sup>なので有益な減量に成り犠牲とは言えない。肥満度を表す体格指数 BMI (体重 [kg] ÷ 身長 [m]<sup>2</sup>) 値が 25 超では危険信号とされ、推定身長に対する 75<sup>キ</sup>は約 24 なので矯正前は北朝鮮の 3 代首領と同じ肥満であったろう。「有銭難買老来瘦身」

（金が有っても老來の瘦せは買え難い）という養生訓を思い起すと、宣言通り素食のみにしたのなら不摂生を治す生活習慣の改善の実践の様にも受け取れる。20日間1粒も主食を食べず野菜だけで腹を拵えたと言う伝説は飽食社会の瘦身法に近いが、秘書（54～66）林克は美しやかに流布されたこの「証言」を作り話として否定している。<sup>130)</sup>

インタビュー・ノンフィクション  
口述記録文学『走下神壇の毛沢東』（神棚を歩み下りた毛沢東。中外文化出版公司、1989）には、著者権延赤（北京空軍政治部創作員）が纏めた毛の最後の護衛長（56～62）李銀橋の証言として、60年は最も困難な年で毛は7ヵ月間1口も肉を食べず果てには蹠辺りに浮腫が出たと有る。屢々1皿の馬齒莧（野草）を食事代りにし1皿の炒めた法蓮草で1日の仕事の精力を賄った云々の「事績」まで挙げられた<sup>131)</sup>が、『毛沢東伝』では「断肉」（「断食」に擬えた造語）の開始に言及したものの持続期間の記載は無く、婦長は栄養不足に由る健康への悪影響を防ぐべく毎日食事の熱量を計算していたと書いてある。<sup>132)</sup> 献身的な自己規制に由る浮腫が事実なら官製伝記の編著者が喜んで入れたはずであるが、『毛伝』の中で足の浮腫に関する唯一の記述は長沙静養中の74年秋～冬の部分に在り、護衛隊長（62～76）陳長江がその歩行の困難と両足の異様な浮腫を振り返ったものである。<sup>133)</sup> 「男怕穿鞋，女怕戴帽」（男は「靴を履く」様が怖く、女は「帽子を被る」様が怖い）という諺の通り、男性の足と女性の顔が其々靴を履いている様が帽子を被っている様に浮腫んでいるのは、心臓の衰弱や腎臓の疾患等に起因し命に関りかねない重症の現れとして恐れられている。足の浮腫は翌々年の死で怖さが証明されただけに件の美談にも登場したのかも知れないが、「可歌可泣」（歌に謳い涙を流すに値する）の様な物語は仮に「編造」（虚構。捏造）なら、「可歌可泣」と同音・同声調の「可割可棄」（割愛・棄却に値する。造語）が妥当であろう。軍の専属作家が伝えた元護衛長の回顧は新種の「造神」（神を創る）の性格も混じっており、刊行（4月）後の当局の自滅的な暴挙への反動で起きた大衆の毛への懐古に妙に合致した。書名中の「走下」は故人が自ら神の座から歩み下りた様な印象を巧みに作り出しているが、泥臭くて生々しい素顔や内幕を曝す様な秘話は寧ろ毛の威信失墜を食い止める思惑が有り、「金装」（金の塗装）が剥がれた後の似而非「人間像」を尊崇の対象として祭り上げている。只お涙頂戴の美化も「催人涙下」（人の涙を誘う）の国難と涙汲ましい努力の真実を含み、『毛沢東選集』第4巻発売開始（60.10.1）の当月に彼が地獄を見たという上記の史実は、李の「追憶」では何月からという「肉断ち」の時期の未記載に拘らず裏付けが得られる。

『毛沢東伝』では1960年の農村の深刻な状況に対する沈痛の現れとして不眠をも挙げた<sup>134)</sup>が、元々彼は長年重度の不眠症に悩まされ続け天下泰平の時も大量の睡眠薬に依存しており、<sup>135)</sup> 自己規定した日常生活の3大用事も「寝る・お茶を飲む・飯を食う」の順と為っている。<sup>136)</sup> 『毛伝』の同年10月の「開始吃素，不吃肉了」（素食を始め、肉料理を止めた）の直前に、「心情極為沈重，常常睡不着覺」（大変気が沈んでおり、屢々眠れなかった）と書いてある。3番目の

「吃飯」に先んじて記された最重要の「睡覺」の不如意は苦悩の所為も当然有るが、「新常态」<sup>ニュー・ノーマル</sup>と言うよりも「老毛病」（持病。悪癖）の側面が大きく過度の美化に値しない。中共中央文献研究室編、金沖及主編『周恩来伝』（4巻、中央文献出版社、1998）第56章『度過嚴峻的困難歲月』（過酷な歳月を乗り切る）の記載では、総理は60年6月以降の主要都市等の食糧在庫が底を衝く寸前に差し掛った極限状況の中で、緊急調達の重責の為に「吃不下飯，睡不好覺」（食欲が進まず、好く眠れなかった）と有る。<sup>137)</sup>年初から食糧難に由る浮腫・「非正常死亡」が全国的に多発し冬に「信陽事件」が起きたが、「痛心和焦灼」（心痛と焦燥）を禁じ得ない彼の最も困難な時期の食事に関する自己規制は、家で余り肉を食べない事と地方視察で肉・卵・揚げ物の料理を少な目にする事に止まった。<sup>138)</sup>権延赤の『走下聖壇的周恩来』（聖壇を歩み下りた周恩来。中共中央党校出版社、1993）には、彼と夫人鄧穎超は「困難時期」に肉・卵を食べないこと等を決めたという記述が有る<sup>139)</sup>が、実施の期間・詳細が無いので当該口述記録文学のこの件の信憑性にも疑問が持たれる。周程毛を追跡しない他の中央首長の官製伝記を見れば同時期の個人的な悲壮感が更に薄く、中共中央文献研究室編、楊勝群主編『鄧小平伝（1904—1974）』（2巻、中央文献出版社、2014）第32章『克服嚴重經濟困難（上）』（深刻な経済困難を克服する [上]）では、60年冬に顕著と成った食糧難・大飢饉に対する機敏な対応が有っても心情への言及は無く、唯一の節食の事績は北京近郊を視察中に素食だけ食べ豆腐を添えるのも市委の許可を取ったと言う。<sup>140)</sup>

中共中央文献研究室編、逢先知・馮蕙主編『毛沢東年譜（一九四九——一九七六）』（6巻、中央文献出版社、2013）の1960年10月の部分に、庶民と共に国難を凌ぐ為に節約の垂範として素食を始め肉は止めると言った宣言が有るが、脚注ではこれは婦長呉旭君の回想に拠る記述であると断った上で汪東興の回想をも併記し、それに拠ると毛は1月1日から豚肉と鶏を食べないと12月に宣言したという事である。<sup>141)</sup>10月に大量餓死を把握したとする『毛沢東伝』の裏付けとして26日の「信陽事件」調査報告閲覧が有るが、『年譜』ではこの出来事の4日前のスノーとの会見・夕食会での談話を3頁程引いている。その中で彼は人民の生活水準が一定の改善をしたものの根本的な変貌が無い事の例として、年に肉を数十キ。食べる欧州人と違って中国人は素食が基本で肉は余り多く食べないと語った。<sup>142)</sup>素食に徹する様に成ったとしても伝統・現状への回帰と思われ180度の転換ではないが、長年の大番頭汪の極めて具体的な証言を採るなら『毛伝』の「断肉」説も揺らいで来る。中国では豚肉は肉の代表格で鶏肉は重宝されるから毛の自粛対象に成ったのであろうが、肉食が好きな周恩来も逆上せ易い体質の所為で医師の勧告で鶏肉を平素敬遠していた<sup>143)</sup>ので、美味しくて栄養が高い形象の強い鶏肉も万民に好まれていながら相性の好くない人が居る。豚肉の醤油煮込みを好物とする毛は鶏肉が好きでない<sup>144)</sup>ので件の宣言は半分無意味であり、牛肉・羊肉も余り好まないとも言われる<sup>145)</sup>ものの受け付けない訳ではなかった様である。『年譜』に珍しく記された私的な外食として56年10

月6日10時半～11時の例が有るが、日本商品展覧会を参観する前に北京の西安飯店で食べたのは羊肉泡饅（羊肉のスープに千切った餅等を浸した西北の美食）である。<sup>146)</sup> インドネシア大統領スカルノを空港で見送った後のこの息抜きは李銀橋の提案に拠る事で、毛は羊肉が好きでないので数口しか食わず暫しの憩いと自由を楽しんだだけだと言う。<sup>147)</sup> 『神壇』の中の別の逸話として60年12月末に李・汪・林克等7人を招いた夕食が有り、肉料理の無い席上で長い説教をし汪以外の6人の秘書・護衛に山東での農村調査を命じた。満67歳に成る翌26日に林克を始めとする一同への手紙で出張先を信陽に変える旨を伝え、「他怕我們“很飢餓”」（我々は「大変飢える」と彼は心配した）という印象を李に与えた。<sup>148)</sup> 『年譜』では同日の唯一の記述が林克等に手紙を書いた事と手紙の詳細な引用であり、中の「你們如果很飢餓，我給你們送牛羊肉去」（君たちが若し大変飢えるなら、牛肉・羊肉を送ります）という1文<sup>149)</sup> は、特筆すべき善意なのに上記回想では3文字しか引かれておらず差し入れの件は消された。林の『我所知道的毛沢東——林克談話録』（私が知っている毛沢東——林克談話録。中央文献出版社、2000）の該当個所に至っては、25日（「26日」と誤記）の会食での毛の談義を3頁に亘って引いたのに手紙の件は出ない。<sup>150)</sup> 林は「有一段時間自己不吃肉，不吃蛋，為全国各級幹部樹了榜樣。」（一時期に自ら肉を食わず、卵を食わず、全国の各級の幹部に模範を示した）と述べている<sup>151)</sup> ので、中南海では牛肉・羊肉なら裾分けの余裕も有るという推測を避けたかったのかも知れない。

「禁欲」の実態に対する封印は禁域中の機密の為ではなく伝説との不整合が考えられるが、『神壇』の中の「7ヶ月没吃一口肉」「浮腫」云々の次に元護衛長が披露した事には隙が有る。周恩来は何回も「主席，吃口猪肉吧，為全党全国人民吃一口吧！」（主席，1口でも豚肉を食べてよ。全党・全国人民の為に1口でも食べて下さい）と懇願した<sup>152)</sup> と言うが、肉の代名詞である豚肉を全称で表すのは牛肉や羊肉で我慢しない様にと解釈も出来る。2人とも「紅燒肉」（豚肉の醤油煮込み）・「冰糖肘子」（豚の腿肉の冰糖煮込み）が好物で、<sup>153)</sup> 毛沢東は曾て困難な転戦中で勝利への唯一の自己褒美として「紅燒肉」を強請った<sup>154)</sup> 程なので、取り分け豚肉を食べない事は禁断症状が起きかねない様な辛い事であったに違い無い。毛は「你不是也不吃嗎？大家都不吃。」（君も食べないじゃないか。皆食べない様にしよう）と答えたが、彼の「与全国人民同甘共苦」（全国人民と甘苦を共にする）は周と照らせば偽善的に見え、林克のこの賛辭の前の「帶頭節衣縮食」（率先して衣食を切り詰める）は「住」が欠けている。『聖壇』には『衣食住行』の章が有り住居・交通に於ける儉約や生活習慣も書かれており、『五次發脾氣』（5回の激怒）の章の中の1回は「住」関係で『周恩来伝』でも詳述されている。中南海内の公邸（兼夫妻の私邸）西花庁は余りにも古く暗く湿っぽいので修繕が必要で、夫人の了解で60年1月初め以降の出張を利用して秘書の仕切りで最小限の事を施したが、周は3月6日に帰って煉瓦の地面に板の床が敷かれた等の細やかな変貌を見て愕然とし、国家が経済的な困難に直面している最中に何故率先して自宅の修繕をするのかと叱った。結局入室を拒んで執務・宿泊の場を

釣魚台賓館に移り又國務院会議等で自己反省を行い、最後は新しい窓掛<sup>カーテン</sup>を撤去させる等で可能な限り修繕前の原状に戻してから漸く帰宅した。副総理・閣僚等は当初修繕後の西花庁を見ても寧ろ素朴さに驚くばかりであったので、周の些か過度な批判と「懺悔」が他の高官の贅沢欲求の歯止めになった効果は絶大である。<sup>155)</sup>

『神壇』第7章『你見過毛沢東哭嗎？』（貴方は毛沢東が泣いたのを見た事が有るか）には、7ヵ月も肉を食べず浮腫が出たという疑わしい話の前に領袖への欺瞞の種明かしが有る。1959年に「大躍進」の実態に不安を感じ始めた彼は河南視察で実地考査をしようとして、ある時疾走中の専用列車から遠くの村を指して「行って見てみたい」と臨時停車を命じた。農民の生活は一体どうなのか、其処で「紅焼肉」を食わせて貰えるかどうかと言ったが、護衛長は直ちに電話で上級部門に連絡しそれから列車を止めて彼を村まで案内したので、到着の時には所望<sup>しよぼう</sup>の肉料理は元より更に現実離れの子豚の丸焼きでさえ用意されていた。<sup>156)</sup>『年譜』に記された同年の2回の河南滞在（2.26～3.10）にはこの秘話は当然見当たらないが、折角<sup>せつかく</sup>の「突然襲撃」（不意打ち）も部下の組織的な誤魔化しに阻まれて真実に辿り付けず、スターリンや北朝鮮の独裁首領と同じく「裸の王様」に化す宿命からは逃げられなかった。『年譜』に見える極少ない民家視察の事例として56年5月30日の長沙での1件が有り、広州から特別機で来た後市委の報告を聴き湘江を泳ぎ岸辺の1戸の野菜農家を訪れたと言う。<sup>157)</sup>李志綏著『毛沢東私人医生回憶録』（毛沢東の主治医の回想録。[台北]時報文化出版公司、1994）では、専用列車で広州から長沙に到着した翌日の事として故郷の大河での水泳を記しているが、臨時に車を止めさせて予定と違う場所で川に飛び込んだ処は毛の「任性」（我が儘）らしい。中洲の橘子洲<sup>きつしじゅう</sup>に上がった後は数軒有る古い茅屋<sup>ぼうおく</sup>の1軒の門前に寄って老婆に話を掛けたが、着古した服を縫い繕<sup>つくろ</sup>う針仕事に没頭した彼女は目の前の男の正体に気付ず返事しなかった。毛が「日子過得怎麼樣？」（此処の暮し向きはどうかね）という質問を繰り返すと、相変らず目を伏せた儘で「馬馬虎虎<sup>マーマーフーフー</sup>」（ぼちぼちじゃ）と面倒臭<sup>ひとごと</sup>そうに1言だけ答えた。<sup>158)</sup>老婆が領袖に由る下問である事が分つていようとしまいと無視に近い反応<sup>159)</sup>は自然体に映り、その襤褸<sup>ぼろき</sup>着姿とボロボロの家も衣食住の不足を露呈したので真実との奇跡的な遭遇である。

想定外の立ち寄りに狼狽した省公安庁は毛が去った後に島の住民を他所に引っ越させ、「悪質分子」の排除と共に地名に相応しい柑橘類<sup>かんきつ</sup>の樹を大量に植えて島を公園に改造し、その結果1959年6月の再訪時に島にはもう人影も無かったと李は壮大な偽装を描いている。<sup>160)</sup>『毛沢東年譜』では6月24日に専用列車で武昌から長沙に着き湘江で水泳後橘子洲に上がり、橘子洲完全（6年制）小学に行って運動場で寄って来た小学生と記念写真を撮ったと有る。<sup>161)</sup>学校名・撮影まで記したので全住民が追い出されたとは又もや李の事実誤認であろうが、毛は橘子洲に特別の思い入れが有るので当初の荒廃が事実なら象徴的な意味が感じられる。存命中に発表された毛の詩・詞<sup>うた</sup>の中で創作時期が最も早い『沁園春・長沙』（25）の冒頭は、「独立寒秋，湘江

北去，橘子洲頭。」（独り寒き秋に立てば，湘江北に去る，橘子洲頭）と為っている。<sup>162</sup> 内面世界を芸術的に表出した詩・詞の中で自ら公式の第1篇とした作は「独」で始まるが，次の「立」及び10年後の『念奴嬌・崑崙』の中の「裁」との組み合わせは深い示唆を持つ。長征が終った35年10月のこの作では西北に在る山脈の雪融けで洪水を起し易い罪に触れ，「安得倚天抽宝剑，把汝裁為三截？一截遺歐，一截贈美，一截還東國。」（安んぞ天に倚り宝剑を抽くを得て，汝を三截に裁ちきらんかな。一截を欧に遣し，一截を美に贈り，一截を東なる國に還さん<sup>163</sup>）と豪語する。新疆等に在る神話上の聖山を欧・米と日本を含む亜細亞に分割するとは今の人が唱えれば，「（多民族国家中の少数）民族分裂」「売国」といった罪名で手を後ろに回されかねないが，毛は破天荒な事を言ってもその封建的な統治の「伝家の宝剑」を恐れて異論が出難かった（「伝家の宝剑」は日本語の「伝家の宝刀」及び「宝剑・封建」の同音に因んだ造語であり，超絶の専決権限の象徴と為る中国古代の「尚方宝剑」[皇帝御用達の宝剑]にも引っ掛ける）。「千秋功罪，誰人曾与評説？」（千秋の功罪，誰れかかつて評説を与えたる）というこの詞の問いに因んで，国際共産主義運動と外交で堅持した独立と党・国内での独裁が彼の功と罪に挙げられよう。

1953～69年に中央警備団団長（聯隊長）を務めた張耀祠（55年大佐，64年少将）は，毛の死去まで仕えた側近としてその保衛・起居の手配を仕切り証言の信憑性も自ずと高い。建国後は「紅焼肉」は脂肪が多い故に余り食べなくなり「腊肉（塩漬又は燻製の肉）・香肠」の類も止めて，夏に野草の馬齒莧を好んだという回想<sup>164</sup>は因らずも『神壇』の美談に疑問符を付けている。医師がコレステロールの低い牛肉・羊肉を勧めた事も有って60年代初めに西洋料理を好み，61年4月28日に料理人が彼の為に作った西洋料理の献立表には牛肉・羊肉が多用された。『毛沢東遺物事典』に収録されたこの記録は「断肉」神話を否定する材料にも使われた<sup>165</sup>が，60年10月から7ヵ月に亘った「断肉」の解禁の傍証と見れば毛には有利な一面も有る。この献立表に多く出ている魚・蝦類は晩年の毛の魚好きに関する張の追憶<sup>166</sup>にも合致するが，毛の「素食」宣言は「素」の対義語の「葷」（腥物。動物性食品）に有る魚を禁じていない。豚・牛・羊を使う肉料理を「大葷」とし鶏・魚・卵の場合を「小葷」と言う考えも有るが，羅竹風主編『漢語大詞典』（13巻，[上海]漢語大詞典出版社，86～94）の【大葷】の語釈は，「謂肥膩の肉食，有時特指猪肉」（油っ濃い肉類の食べ物を謂い，特に豚肉を指す時が有る）である。中国社会科学院語言研究所詞典編輯室編『現代漢語詞典』第6版（商務印書館，2012）では，【葷】の①は「指鶏鴨魚肉等食物」（鶏・家鴨・魚・肉等の食べ物を指す）と定義されている。子見出し語の【葷菜】は鶏・家鴨・魚・肉で作った料理の意で，【葷腥】は魚・肉等の食品を指し，【葷油】は食用の「猪油」（豚の脂）を指すが，61年元日から鶏・豚肉を食べないと言う上記宣言は非「素」の家鴨・魚を飛ばしているし，料理人程汝明は「葱花餅」（小麦粉に刻み葱を入れて焼いた主食）に猪油を大量に入れ，「断肉」制限の中で60年除夜から暫くの間に目

立たない形の「液体豚肉」の補充を行った。<sup>167)</sup>

中央首長御用栄養保健専門家等に拠ると指導者たちは豚・牛・羊を食べることが少なく、合理性として此等の4本足の動物の栄養が2本足の鶏・家鴨に及ばないことが挙げられる。2本足の動物よりも1本足の菌が益して足の無い魚が健康に最も好いとも言われている<sup>168)</sup>ので、魚・蝦を欠かさない晩年の食事を長寿の1因とした分析は一時の肉断ちと同じく理に適う。但し肉断ち後の毛は国家副主席宋慶齡(孫文夫人)が贈った蟹を全て護衛等に与えた<sup>169)</sup>ので、東北から貢がれた虎・鹿の肉も食わず皆に遣るよう指示したのと同様の自粛が見られる。李志綏は暴露本の中で汪東興の意を受けて自ら口説き断られたという後者の例を挙げた後、中南海の関係者は此等の虎肉・鹿肉のお蔭で何回か益しな食事が出来たのかも知れないが、毛の犠牲は大飢饉には些かも役に立たず崩壊した農業の早期回復には直結しないと評した。<sup>170)</sup>「尽管如此、毛主席這個姿態仍贏得了大家的讚嘆。」(にも関わらず、毛主席のこうした姿勢は皆の讚嘆を勝ち取ったのである)という続きの文は、著者が主体を為す地の文で呼び捨ての「毛」に終始した全書の中で珍しい敬称を使った。毛への忠誠心が強く毛の信頼も厚い韓先楚(福州・蘭州軍区司令官等を歴任、上將)は、「文革」後に息子が「毛主席」ならぬ「毛沢東」の呼び名を使う事に不快を感じ叱った<sup>171)</sup>が、「神壇を歩み下りた」故領袖を描く李銀橋の語りは権延赤に由って「毛沢東」で統一された。この種の「不敬」の憚りが最早無い時代に定住先の米国で執筆された李志綏の回想録では、『序幕 毛沢東之死』の冒頭の「主席、你叫我?」(主席、お呼びですか)という昔の会話の再現の次に、地の文の最初の2句の主語は「神壇」からの脱出・離反を映す様に「毛沢東」「毛」と為る。<sup>172)</sup>以下は客観化の効果と批判的な立場を貫く心算も有ったのか「毛」が圧倒的に多いので、「脱“主席”」化の中のこの昔流の「毛主席」は自らの当時の讚嘆の投影として興味深い。彼我の尊卑・親疎等を表す機能が強い中国語の人称代名詞は使い手の心の窓と言えるので、毛と訣別し敵視の立場に回ってもこの件では敬意を持ち続けた微妙な感情が見て取れる。

「紅牆」(朱色の塙)に囲まれた特権階層の住人たちも遂に飢饉の辛酸を舐めるに至り、食糧配給の激減と肉・卵・食用油の供給停止の上に山羊狩りの遠征もやがて収穫零に成った。毛沢東は栄養失調に由る中南海内の浮腫・肝炎の蔓延を聞いても冷淡な反応しか見せず、実態を報告した李志綏は無慈悲を感じながらも彼の肉断ちを大きな譲歩として評価した。<sup>173)</sup>毛の「健康16字訣」(16字の健康法要訣)の第1条は「基本吃素」(素食を基本とす)で、<sup>174)</sup>これを承知のはずの李が尚且犠牲と捉えたのは肉を贅沢品と見る庶民感覚の所以であろう。毛の為に特製した精進料理は肉料理よりも原価が高いという絡線に就いて言及が無いのは、持場の違いで料理番が仕切る厨房に減多に入らず内情を余り知れなかった事も考えられる。周恩来は中央が率先して「以素代葷」(素食を以て肉類に代える)と提案し毛も実践したが、汪東興と中央警備局服務科長の要請で料理人蘇林発は毛の為に上海の精進料理を特製し、その「烤麩」(発酵

後に蒸した生麩<sup>なまふ</sup>）等は植物油<sup>かなり</sup>が可也要り費用も肉料理並みのはずである。1960年10月に特命を受けた蘇は後に毛の「私人厨師」（お抱え料理人）を5年務めた<sup>175)</sup>が、最高指導部成員の専属料理人同士でも其々の主<sup>ぬし</sup>の飲食に就いての情報交換は御法度<sup>176)</sup>なので、元々北京出身で上海の美食<sup>グルメ</sup>に疎いであろう李は裏の奥秘を窺い知る由が無いかも知れない。要人等専用の「紅機網（赤い受話器を用いる高度暗号化特殊回線）電話」に因んで言えば、「紅墻」で外と遮断した中南海は内も多重の「防火墻<sup>ファイアー・ウォール</sup>」で分断された秘密の王国である。

一方、1961年初頭の毛の湖南視察中に起きた肉料理の大盤振舞<sup>おおばんぶるまい</sup>の裏話が取り上げられているが、その記述は著者の記憶の壁と「御上」一行が地方で守られ且つぶつかった壁を感じさせる。長沙附近の黒石舗に1泊し劉少奇・周恩来を北京から呼んで専用列車で3者会議を開いた（『毛沢東年譜』の該当部分の記載では、2月11、12日に長沙附近に停まった専用列車で省委責任者〔第1書記張平化等〕・胡喬木の報告を聴いたとし、劉・周の同席は無い<sup>177)</sup>）が、翌日去った後に省委招待庁は省委に2000羽以上の鶏が食べられた等の必要経費を申告した。張平化は中央警備局長・公安部副部長汪東興に対して20羽の誤りかも知れないと言ったが、省公安庁長李祥は当夜に鉄道沿線・飛行場と周辺3県で民兵等1万5000人が警備に当り、寒い中で腹<sup>はら</sup>拵<sup>こしら</sup>えに提供しなければならず毛一行に請求するしか無いと正当性を主張した。<sup>178)</sup>江西省副省長（58.3～60.9）として都落ち中に底辺の実態と裏事情を見た汪は憤慨したが、毛に尻拭いをさせようと企む酷い悪巧みとした受け止め方<sup>179)</sup>は些か厳し過ぎた様に思われる。56年5月の湘江水泳の直前に道路から川岸へ向う毛付き一行中の李祥が突然水蛇に咬まれ、公安部長羅瑞卿は不慮の事態に動揺し附近一帯の徹底的な事前点検の不十分を咎めたが、汪は決められた行動が嫌いで好く土壇場で計画を変え誰も阻止できない毛の習性を熟知し、今後水泳の場合は予定地点の沿岸上・下各5<sup>キ</sup>の範囲で捜査を徹底させるよう提言した。<sup>180)</sup> 停まる「専列」が万衆を走らし沿線の隣県にまで敷かれた大掛りの過剰警備に掛る費用は、民を家来の様に扱い人件費<sup>ただ</sup>が無料同然の時代でも毛の肉料理の10年分を超えたはずである。「神壇」から人界に下りた彼の為に人海戦術で築き上げられた厳重な「人墻」（人の墻）は、毛1人の安危は無数の言わば「塵界の塵芥」の甘苦より重いという価値観を浮彫にした。

「先君」（同音・同声調の「先軍<sup>xiānjūn</sup>」に擬え君主優先を表す意）の威風は封建時代の遺風で、「文革」中の江青も専用列車や特別機を欲しい儘に使い大量の関係者を振り回す外出を、「巡撫出朝、地動山揺」（巡撫<sup>みよこ</sup>が朝を出ると、地が動き山が揺れる）という熟語で形容した。<sup>181)</sup> 皇帝から派遣された地方長官が首都から赴任地へ向う時の大地や山も揺れ動く様な衝撃は、下の役人が接遇<sup>もてなし</sup>の不備や普段の過誤への問責を恐れて過剰な厚遇・保身に走る為である。こう自称して憚らなかつた江の優越感<sup>もてなし</sup>は毛夫人と「文革旗手」の特権に由る物であるが、震動（影響）の大きさは建国初期から常態化していた夫君の「巡幸」の方が数段上である。「地動山揺」は立ち回りの激しさ等の譬えの他に地が動き山が揺らぐ地震を指す意も有り、その下に「叫化子抛瓢」

(乞食も貰い物を入れる瓢箪等を抛り投げて了う)と続く俗諺は、強震が起きた年に豊作のおぼろれの喜捨が望めず乞食も廃業に追い込まれる程の窮状を表す。毛沢東時代では「億万(国民)総貧者」(和製熟語「億万長者」を振った造語)に由って、身代金が望めない故か誘拐罪は初の刑法(1979.7.1採択, 7.6公布, 80.1.1実施)には無く、97年の修訂(3.14採択・公布, 10.1実施)で漸く第239条として盛り込まれるに至ったが、59年秋からの3年間は大地震が無かったものの他郷へ浮浪して行く物乞いは寧ろ急増した。鶏肉を好まない毛は「叫化子鶏」(乞食鶏。泥等を塗った儘焼く鶏)が特別に好きである<sup>182)</sup>が、乞食が盗んだ鶏に泥を塗って隠して置きその儘焼いて食べたという由来に纏わるかの様に、多くの人を乞食の道に追い遣った飢饉の中で毛は「吃」(食う)の「口+乞」の字形の通り、周辺護衛の「人海」に対して7.5人に1羽の割合の鶏の「食乞い」に応じざるを得なかった。党歌が無い中共の準党歌とも言える『インターナショナル』の冒頭の歌詞の中国語訳は、「起来, 飢寒交迫的奴隸!」(起ち上がれ, 飢えと寒さに苛まれた奴隸)と為っている。パリ・コミューンの失敗(1871. 5.28)直後ポティエが国内逃走中に作詞したこの歌に照らせば、90年後の厳冬の夜「安全網」を織り成した民兵大軍団への「聊補無米之炊」は当然である。毛は3000万人超と推計された3年間の「非正常死亡」者の怨霊に付き纏われたかの如く、件の1夜の恰度11年後の2月12日未明に心肺の持病の発作で一時死に神と擦れ違った。乞食の窃盗・隠蔽と加工・享受が祖形と成った「叫化子鶏」の言い伝えに因んで言うなら、人民を「飢えと寒さに苛まれた奴隸」に化した失政は党・国の顔に泥を塗る様で罪深い。

毛沢東は「9大」の翌月に2年近く振りに北京を出て武漢に滞在し(1969.5.31~6.26)、其処で曾思玉(湖北省委第1書記・省革委主任・武漢軍区司令官, 中將)の報告を聴き、同省の前年の洪水退治と本年の豊作有望を喜び食糧を国民経済の基礎中の基礎として強調した。更に、「飯」に「食」が欠けると「反」に成るという漢字の妙が示唆する道理として、「如果老百姓没有飯吃, 就要起来造反的」(庶民は若し食事が無いと, 起ち上がって造反するものだ)と言った。その場で「民以食为天」(民は食を以て天と為す)という古来の熟語を引いた<sup>183)</sup>彼は50年前、『《湘江評論》創刊宣言』(19.7.14)で「吃飯」(食事)が世の中の最大の問題だと書いた。ポティエ逝去30周年の翌日に露西亜の首都で冬宮を攻め落す「10月革命」が起きたが、中国語版『国際歌』の訳詞の飢餓・寒冷の二重苦はその雪国の人々の窮境にも符合する。瞿秋白に由る『国際歌』の最初の中国語訳は『新青年』新1号(23.6.15)に発表されたが、30年後の同じ日に生れた習近平も彼と同じく後に党首と成った事は中共の初心を思わせる。『新青年』は初代党首陳独秀が建党前から創設・主催した月刊(15.9.15~22.7.1)であり、建党直前の上海のフランス・仏蘭西租界当局の取締も有って停刊と成った後に季刊として復活した。現代文学の第1声と為る魯迅の小説『狂人日記』を載せた(4巻5号, 18.5.15)同誌は、党の理論誌への変貌を遂げた後に実務面の困難に由って26年の新6号を以て終了したが、当初の社会的な反響と2代の

責任者を見ても草創期の中共の素質と影響力の高さが判る。

毛沢東時代の「代国歌」（暫定国歌）『義勇軍進行（行進）曲』（田漢作詞・聶耳作曲）も、冒頭の「起来！不願做奴隸的人們！」（立ち上がれ、奴隸に成りたくない人々よ）は、『<sup>インターナショナル</sup>国際歌』の「起来，飢寒交迫的奴隸」とは「起来」で始まり「奴隸」が出る処が同じで、第1段落の「奴隸們，起来，起来！」（奴隸たちよ，立て，立て）とも通じる呼び掛けである。映画『風雲児女』（上海電通公司製片廠，田漢脚本・許幸之監督）の主題歌としての誕生は、満州事変（1931.9.18）と盧溝橋事変（37.7.7）の間に在り赤軍が長征を行った35年の事で、中国と中共の存亡の危機の下で上げられた雄叫びが国歌に成ったのも「先軍」の証である。茅台酒が建国後「国酒」の誉れを占めたのも長征中赤軍が産地で出会った御蔭だと言う<sup>184</sup>が、この名物を持つ貴州省は改革・開放の恩恵を受けた今も1人当りGDPが全国最低である。政權樹立後の毛は貴州どころか長征後12年間身を寄せていた「<sup>ゆりかご</sup>搖籠」の延安にも行かず、周恩来は73年6月9日に<sup>ベトナム</sup>越南党・政代表团に付き添う形で建国後初めて延安を訪れた際に、「革命の聖地」の人々の旧態依然の窮乏を地元の責任者から報告されて自責の涙を流した。<sup>185</sup>毛は曾思玉との談話で人間は飯を食い服を着ることが欠かせないものだとも述べたが、習近平が79～82年に秘書として仕えた<sup>こうひょう</sup>耿飈（政治局委員 [77～82]、副総理 [78～82]、国防部長 [81～82]）等を歴任）の長女<sup>えい</sup>耿瑩は、彼の依頼で80年代初めに故郷湖南の農村を視察した時1枚のズボンしか無い家に泊まった。夫が柴を刈りに行く間に妻が外出できない状況に遇った桑植県<sup>186</sup>は賀龍元帥の故郷なので、父親たちの革命はこんな天下を目指すのだったかという韓先楚の4男の問いは痛烈である。

空軍操縦士養成学校で勉強中の息子に腹立ちながら韓は内心で毛への「愚忠」を認めた<sup>187</sup>が、「飯－食＝反」の定理に反して共和国の「10歳代」前半の「去食」後も残った「民信」は、「<sup>にくだち</sup>断肉」の美談とは裏腹の毛の帝王並みの奢侈を知らない故に「愚忠」とは言い切れない。建党的年に発表された魯迅の小説『阿Q正伝』では主人公の「奴隸根性」が描かれたが、魯迅の故郷浙江省で90年後に起きた「7.23」高速鉄道事故に対する大衆・<sup>メディア</sup>媒体の糾弾は、最早愚民ではないと宣言する様な<sup>めざめ</sup>覚醒（「起来」の起床の意に因んだ形容）を感じさせる。中共が「不惑」の40歳を迎える年の件の「<sup>くだり</sup>出朝」は鉄道沿線等に迷惑を撒き散したが、「<sup>ほど</sup>地動山揺」程の激震を走らせた「親父」と取り巻きの権勢濫用は鉄壁で隠されていた。<sup>インターネット</sup>「国際互聯網」時代の「天網恢恢，疎而不漏」（天網恢恢，疎にして漏らさず）に対して、当時の情報封鎖は嚴重警備と同様「天羅地網」（天地に張り廻らす網）を敷く物であった。1個所で1万人余りも巻き込まれた毛の視察はその走狗を以て自任した江青<sup>188</sup>の比ではなく、「飢・寒」を凌ぐ「衣・食」より遙かに出費が高い「住・行」での贅沢さは想像を絶する。その内情を<sup>かなり</sup>可也知っていたはずの韓先楚の毛死後も変らぬ尊崇は<sup>や</sup>矢張り「愚忠」であり、逆に『「五七一工程」紀要』の毛沢東批判が生活面の放恣に触れていない事には引掛る。

「天羅地網」は敵や犯人が逃げられない様な包圍網の譬えに使うのが一般的であるが、字面は羅瑞卿等が作った「安全網」以外の地点で川に降りた毛の「天子」振りとも合う。その大河を舞台とする詞『沁園春・長沙』は「独立寒秋，湘江北去，橘子洲頭」で始まり，多くの友人と共にこの中洲に遊びに来た往事や積み重ねた多難の歳月を振り返る後半に，「恰同学少年，風華正茂；書生意氣，揮斥方遒。指点江山，激揚文字，糞土當年萬戶侯。」（恰同学の少年，風華正を茂りに；書生の意氣，揮斥にして方に適かりき。江山を指点い，激むると揚むる文字，當年の萬戶の侯を糞土とせり<sup>189)</sup>）と有る。故郷の表徴と為る河川は自ら編集主幹を務めた政論紙『湘江評論』の名称にも登場したが，この湖南学生聯合週刊は正に「激揚文字」の為に軍閥張敬堯の取締で1ヵ月後に停刊した。『「五七一工程」紀要』の言わば「糞土当今秦始皇」はより激越な「憤青意氣」と言えるが，当の少壮将校集団も王侯気分が横行する「超級」権貴階層に属し毛と五十歩百歩であり，親の威光で影の空軍司令官と成った林立果の為の「選妃」は毛の放蕩に勝つとも劣らない。韓先楚は林彪辦公室の要員に福州軍区の協力を断り公私混同の自戒を葉群に要請したが，主席の後継者の名誉と党の伝統に関ると言う忠告も空しくその「王八蛋工程」は続行された。<sup>190)</sup>林立果は「9.13」の際に数万人の候補者から精選した3人を連れて行く暇が無かった<sup>191)</sup>が，「巴黎公社」と『国際歌』歌詞創作の100年周年は「半百」（50歳）を迎える中共にとって，「五七一工程」と首謀者が示す様に「乱」（反逆）と「爛」（腐敗）が擡頭した年である。

## 解題

本稿は本誌27巻4号に掲載された同題論文の続篇である。前号では記念論文特集の性格で連載の形が取れない為，変則的な区切り方をしており，以下の注も前篇に続く通し番号を使う次第である。

**注解**（筆者の過去論文で出処を記した極一部の個所に就いては，重複を避ける為に注を略している。

猶，本部分中に出処と為る インターネット 電脳網情報の最終閲覧日は，全て脱稿前点検の2015年5月12日である。）

- 54) 『災害大国 あすへの備え 関東大震災を知る 90年経っても通じる教訓』（編集委員黒沢大陸），『関東大震災 90年 今も怖い 火災旋風，一瞬で人をのんだ』（北林晃治），『朝日新聞』2013年9月1日。
- 55) 艾未未（芸術家・建築家）は2008年12月15日に自らの「博客」で犠牲者実態調査の開始を宣言し，翌年4月14日時点で5385人の名簿が作成された（Ai Weiwei『5.12 遇難学生名单 補充（八十四）09.04.11』）。
- 56) 羅環『朱鎔基総理与98洪災』，九江史志網，2010年9月11日。
- 57) 卞遷『文革中与毛沢東“平起平坐”的小人物』，『文史博覽』（中国人民政治協商會議湖南省委主催，月刊）2009年第6期。
- 58) 『為了党中央的重托 守堤百万大軍鏖戰洪水記事』（記者劉工踐・杜若原），『人民日報』1998年8月16日。
- 59) 馬玲・李銘『温家宝』，[台北] 經聯出版公司，2003年，108頁。

- 60) 銭鋼『唐山大地震』, 41～42頁。
- 61) 『防衛庁・自衛隊, 2万9000人, 最大規模の救助計画——兵庫県南部地震』, 『日本経済新聞』1995年1月19日; 『自衛隊の震災復旧作業 地元の協力度合いで進ちよく状況に差』(解説部松岡宇直), 『読売新聞』同2月15日。
- 62) 舒雲『為蒙冤22年の丁盛將軍翻案』(『華夏文摘増刊 文革通訊 [五二三]』, 中国新聞電網網絡 [CND] 主催, 増刊第六九一期, 2009年2月24日)等では、「一個排」(小隊1個)と言うより極端な説も有る。
- 63) 『在決戦決勝の緊要関頭——記江沢民総書記在湖北抗洪搶險第一線』(新華社記者何平・万武義 解放軍報記者王文傑), 『人民日報』1998年8月17日。
- 64) 『温総理発火了: 人民養着你們, 你們看着辦』(〔香港〕鳳凰衛視網, 2008年5月15日)等。
- 65) 『成都滅災所雅安預警之辯 逃生5秒存在嗎?』(記者柴会群・実習生田香凝), 『南方週末』2013年4月25日。
- 66) 『「解放軍來了, 我們就不怕了!」——汶川縣一位地震幸存者講述逃生經歷』(新華社都江堰電, 2008年5月13日, 記者李宜良・李剛), 新華社總編室編『中国汶川抗震救災紀實』(新華出版社, 2008年) 51～52頁。
- 67) 『雅安地震致通訊擁擠 微信微博連通「生命熱線」』, 中国広播網, 2013年4月20日。
- 68) 思葦『中国政府為什麼不查豆腐渣?』, 『華夏文摘増刊』第942期, 2009年4月17日。
- 69) エドガー・スノーと会見する時の談話(1970年12月18日), 『毛沢東伝(1949—1976)』1586頁。
- 70) 注57に同じ。
- 71) 看護婦長呉旭君の回想, 『毛沢東伝(1949—1976)』1664～1665頁。
- 72) 『毛沢東伝(1949—1963)』, 1363頁。
- 73) 注72に同じ。
- 74) 董保存・狄敏『毛沢東為第三個五年計劃確定原則「第一是老百姓, 不能喪失民心」』, 『僑人物伝記』(広東僑会人文学会主催)2014年第5期。
- 75) 洪振快『大飢荒中農民的反応』, 『炎黄春秋』2014年第8期。
- 76) 張聿温『林立果「小艦隊」興亡始末』, 北京出版社, 2014年, 143頁。
- 77) 『毛沢東伝(1949—1976)』, 1607頁。
- 78) 呉徳の回想, 『毛沢東伝(1949—1976)』1611～1617頁。
- 79) 『毛沢東伝(1949—1976)』, 1568頁。
- 80) 都市・農村・親・「知識青年」という4方面の不滿に対する李先念の指摘を下敷にしたとされるこの批判は広く流布して来たが, 文貝『結束知青上山下郷運動は多種因素作用的結果』(個人博客「文具の專欄」[wenbei.blogchina.com/2182244.html], 2014年5月10日)では, 定宜庄・劉小萌著『中国知青史』(当代中国出版社, 1998年)からの引用が多いこの件は, 正規の出処がいまだに見付かっていないとしている。
- 81) 『李慶霖の沈浮人生: 曾上書毛主席「告御状」』, 『名人伝記』(河南文芸出版社, 月刊)2007年9月。
- 82) 注81に同じ。
- 83) 陳昌喜『毛沢東億万稿酬の争議』(『党史文苑』[中共江西省委党史研究室・江西省中共党史研究会主催, 月刊]2004年第5期)に拠れば, 毛の原稿料収入は1976年に7600万元に達し, 利息も含めて2000年には1億3121万元に膨らんだと言う。同じく天文学的な額を主張した『毛沢東億万稿酬処置内情』(『党史博采』[中共河北省委党史研究室・河北省中共党史研究会主催, 月刊]同年第9期)等に対して, 2008年7月から漸く「中国共産党新聞網」等の中央・官製媒体に, 呉連登(毛の最後の12年の生活

管理係)の『毛沢東「億万稿费」謠伝の真相』等の反論が掲載された。呉は毛死去の1976年には124万元であったと断言しているが、呉が汪東興・呉旭君・張玉鳳等と共に顧問を務めた『毛沢東遺物事典』(韶山毛沢東同志記念館編, 1996年)では、50年代に<sup>すでに</sup>已に100万元に達したと記している(511頁)。毛の評価に関する論争は情報公開の不十分に由り決着が付きそうに無いが、本稿筆者は客観性の高い『遺物事典』の上記記述に基づいて、60年代以降の毛の語録・著書の爆発的な<sup>うれゆ</sup>売行きに由る印税で千万元単位に上ったと推量する。

- 84) 『毛沢東伝(1949—1976)』, 1558頁。
- 85) 看護婦長呉旭君の回想, 『毛沢東伝(1949—1976)』1630～1632頁。
- 86) 『毛沢東伝(1949—1976)』, 1626頁。
- 87) 『毛沢東伝(1949—1976)』, 1611頁。
- 88) 李丹慧『林彪事件後, 毛沢東向全党全国作的自己検査交代』(李丹慧主編『国際冷戦史研究』第1輯, 2004年)では、毛は1971年9月～翌年2月に2回重体に陥り、1回目の発作後に10月8日に漸く病体を以て国事行為に臨んだと述べているが、逢先知・馮蕙編『毛沢東年譜(一九四九——一九七六)』(全6巻, 中央文献出版社, 2013年)には、71年10月8日の件の談話(第6巻, 410頁)から元旦(365頁)まで溯っても重体の記述は無い。「9.13」以降の同月の部分(406～408頁)を見ると、16、19～20、22、25、29日には動静が記されていないので、この時期に倒れた可能性が排除できない。官製年譜では数週間前に心臓病で死に掛けたと言う「10.8」発言を報じる一方、裏付けと為る事実を伏せているのは訝れる。「9.13」後の出来事であるとするれば面目を保つ為の隠蔽が疑われるが、史実と記録との整合性の問題として追及が必要である。
- 89) 王豊『蒋介石死亡之謎』(團結出版社, 2009年)等に詳述が有るが、何虎生主編『蒋介石宋美齡在台湾的日子』(華文出版社, 1999年)では、「横禍」の時期を「7月上旬」としている(下冊688頁)。
- 90) 『毛沢東伝(1949—1976)』, 1098頁。
- 91) 葉永烈『「四人幫」興亡』, 人民日報出版社, 2009年, 中巻617頁。
- 92) 『毛沢東伝(1949—1976)』, 1574～1581頁。
- 93) 大華編著『輝煌与罪惡』, 内蒙古人民出版社, 1998年, 下冊497頁。
- 94) 『毛沢東伝(1949—1976)』, 1566～1567、1571～1575頁。
- 95) 汪東興『汪東興回憶——毛沢東与林彪反革命集团的鬭争』第3版, 当代中国出版社, 2010年, 37頁。
- 96) 丁凱文『論汪東興与林彪事件之關係——評《毛沢東与林彪反革命集团的鬭争》』, 『華夏文摘增刊 文革通訊(六四四)』, 增刊第八一二期, 2011年8月22日。
- 97) 許耀桐『民主集中制在中国的認識与發展過程』, 『新視野』(中共北京市委党校主編)2010年第4期。
- 98) 散木『陳独秀「家長制」作風与建党初期多人退党的考察』, 『党史博覽』(中共河南省委党史研究室主編)2008年第5期。
- 99) 『毛沢東伝(1949—1976)』, 1573頁。
- 100) 「僅有七百字的短文」(僅か700字の短い文章)とした『毛沢東伝(1949—1976)』の記述(1579頁)は、700字<sup>ちようど</sup>拾度の印象を与えているが、本稿筆者の統計では題+本文は690字、署名・日付を入れれば704字である。
- 101) 葉永烈『陳伯達伝』(人民日報出版社, 1999年)第2章『服刑18年』、第3章『秦城監獄』。
- 102) 葉永烈『陳伯達伝』第3章『秦城監獄』に詳述が有る。
- 103) 陳曉農編『陳伯達最後口述回憶』([香港]陽光環球出版公司, 2005年)に見えるこの場面は、李劫<sup>かっ</sup>『《五・七一工程紀要》: 毛沢東文革的転捩点』(百家争鳴網 [blog.boxun.com/hero/200906/sql/166\\_1.shtml](http://blog.boxun.com/hero/200906/sql/166_1.shtml)),

掲載日は未記載）で信憑性が高い記述として詳論されている。

- 104) 『毛沢東伝（1949—1976）』, 1591 頁。
- 105) 李根銀『林彪「散記」中对毛沢東的思考』, 『炎黄春秋』（中華炎黄文化研究会主催, 月刊）2014 年第 11 期。
- 106) 呉法憲『歲月艱難——呉法憲回憶録』, [香港] 北星出版社, 2006 年, 下冊 793 頁。程光『心靈的對話——邱会作与兒子談文化大革命』, 北星出版社, 2011 年, 上冊 445 頁。
- 107) 呉法憲『歲月艱難——呉法憲回憶録』, 下冊 792 ~ 793 頁。林彪の講話が終ると直ぐ毛が散会を宣言したとは呉の誤記であり, 『毛沢東伝（1949—1976）』の記載（1573 頁）の通り散会宣言は康生発言の直後の事である。
- 108) 呉東峰『謝富治其人』, 『同舟共進』（中国人民政治協商會議広東省委主催・主管, 月刊）2014 年第 11 期。
- 109) 程光『心靈的對話——邱会作与兒子談文化大革命』, 上冊 447 頁。
- 110) 『毛沢東伝（1949—1976）』, 1483 頁。
- 111) 『毛沢東伝（1949—1976）』, 1547 頁。
- 112) 汪東興『汪東興回憶——毛沢東与林彪反革命集团的鬭争』, 20 頁。
- 113) 注 112 に同じ。
- 114) 『毛主席会見美国友好人士斯诺談話紀要（已經毛主席審閱） 一九七〇年二月十八日』（中共中央『關於転発《毛主席会見美国友好人士斯诺談話紀要》的通知』, 中発 [1971] 39 号, 1971 年 5 月 31 日）では, 「無法無天」の件は出ていないが, 『毛沢東年譜（一九四九——一九七六）』の中の談話記録（第 6 卷 357 ~ 361 頁）には出ている（358 頁）。
- 115) 劉源・何家棟『「四清」疑团』, 郭家寬編『你所不知道的劉少奇』（河南人民出版社, 2000 年）118 頁。
- 116) 『毛沢東伝（1949—1976）』, 1497 頁。
- 117) 『毛沢東伝（1949—1976）』, 1504 ~ 1506 頁。
- 118) 「暴力」とした 1 例は日高 普・長坂 聰・塚本 健 訳の, 「暴力は, 新しい社会を妊んだ古いどの社会でもその助産婦なのである」(鈴木鴻一郎責任編集『世界の名著 43 マルクス・エンゲルス I』第 4 版, 中央公論社, 1979 年, 374 頁) である。対して向坂逸郎訳(『資本論 [三]』[全 9 冊], 岩波文庫, 1969 年, 398 頁) は, 「強力は, 新しい社会をはらむ, すべての古い社会の助産婦である」と為っている。
- 119) H. カレル=ダンコース著, 石崎晴己・東松秀雄訳『レーニンとは何だったか』（藤原書店, 2006 年 [原著は 1998 年刊行]) の『レーニン年譜』(674 ~ 671 頁 [縦組の本文に対する横組の附録である故の頁順。猶, 文中の日付は明記していないがユリウス暦を採用しており, 本稿では西暦に換算した]) 等に参照。
- 120) 陳峰・高敏編著『為什麼學術界在中共一大閉幕時間問題上沒有達成一致的意見?』, 中国共產黨歷史網(中共中央党史研究室主催), 2011 年 5 月 15 日(『中国共產黨歷次全国代表大会: 從一大到十七大』[中共党史出版社, 08 年] より)。
- 121) 陳敦德『毛沢東・尼克松在 1972』, 崑崙出版社, 1988 年, 327 頁。
- 122) 『毛沢東伝(1949—1976)』, 138 ~ 143 頁。文中の刊行時期は年・月のみで, 日付は『毛沢東年譜(一九四九——一九七六)』に拠る(第 1 卷 404 頁, 538 頁, 第 2 卷 80 頁)。
- 123) 『毛沢東伝(1949—1976)』, 1050 ~ 1052 頁。
- 124) 『毛沢東伝(1949—1976)』, 1052 頁。未記載の刊行日は 30 日であるが, 新華社 9 月 28 日電『我国馬克思列寧主義事業的重要事件 我国人民革命勝利鬭争的光輝記録 / 毛沢東選集第四卷出版』(『人民日

- 報』29日)の報道の通り、発売日は10月1日である。『毛沢東年譜(一九四九—一九七六)』でも1960年10月1日の処(第4巻, 457頁)に、中共中央毛沢東選集出版委員会編集・人民出版社出版の『毛選』第4巻は本日より全国で発行すると記してある。
- 125) 『毛沢東伝(1949—1976)』, 1050頁。
- 126) 『毛沢東伝(1949—1976)』, 1097～1098頁。
- 127) 『毛沢東伝(1949—1976)』, 1098頁。
- 128) 諸説の中で本稿は劉尋『毛沢東の身高』(『文史精華』[河北省政協文史資料委員会主催, 月刊]2013年第9期)の推論を取る。
- 129) 劉尋『毛沢東の身高』で否定されたこの伝説の他に1.84説も有り、本稿筆者は『従称謂「魔杖」管窺中国政要心迹及中国社会規則(下之1)——《晚年周恩来》、《毛沢東私人医生回憶録》、《毛家湾紀実》、《国家の囚徒》、《大紅灯笼高高掛》等禁域・深宮話語聯析(本誌24巻2号, 2011.10)の本文中(45～46頁)と注551、556(71頁)で、程波『中共「八大」決策内幕』(中国档案出版社, 1999年)127頁と王曙光『榮家の血脈』(東洋経済新報社, 2006年)97～99頁の中の、上海の実業家榮毅仁と同じ1.84説であった事を示唆する記述を引いた。初対面の場合は其々榮が1950年の政治協商会議に参加した時と同年6月10日に毛が70人余りの工・商界関係者を中南海頤年堂での宴会に招待した時とされているが、『毛沢東年譜(一九四九—一九七六)』第1巻の同6月の部分には、14、23日に全国政協第1期第2次総会の開幕式・閉幕式を司会した事(156、158頁)が有るが、空白と為る10日も含めて上記の招宴は記載されていない。
- 130) 毛の元護衛封耀松等の話に依拠した権延赤『紅牆内外——毛沢東生活実録』(崑崙出版社, 1989年)の記述に対する否定は、林克『我所知道的毛沢東——林克談話録』(中央文献出版社, 2000年)63～65頁に見える。
- 131) 権延赤『走下神壇的毛沢東』, 中外文化出版公司, 1989年, 58頁。
- 132) 『毛沢東伝(1949—1976)』, 1098頁。
- 133) 『毛沢東伝(1949—1976)』, 1709頁。
- 134) 『毛沢東伝(1949—1976)』, 1098頁。
- 135) 権延赤『走下神壇的毛沢東』, 117～123頁; 林克『我所知道的毛沢東——林克談話録』, 67頁; 李志綏『毛沢東私人医生回憶録』, [台北]時報文化出版公司, 1994年, 102～108頁。
- 136) 林克『我所知道的毛沢東——林克談話録』, 67頁。
- 137) 秘書李岩の回想, 中共中央文献研究室編、金沖及主編『周恩来伝』第2版(全4巻, 中央文献出版社, 2008年)第3巻1408頁。
- 138) 『周恩来伝』第2版, 第3巻, 1417～1418頁。
- 139) 権延赤『走近周恩来』(『走下聖壇的周恩来』[中共中央党校出版社, 1993年]より改題・改版), 人民日報出版社, 2010年, 219頁。
- 140) 中共中央文献研究室編・楊勝群主編『鄧小平伝(1904—1974)』, 中央文献出版社, 2014年, 1169頁。
- 141) 『毛沢東年譜(一九四九—一九七六)』, 第4巻, 472頁。
- 142) 『毛沢東年譜(一九四九—一九七六)』, 第4巻, 466頁。
- 143) 権延赤『走近周恩来』, 214～215頁。
- 144) 毛の料理人を務めた康輝に抱れば毛は鶏肉を食べない(『那些年, 中南海里的年夜饭』, 中国共産党新聞網, 2015年2月12日。『内蒙古日報』よりの転載とするが、作者・初出は未記載)が、毛に批判的な見方をする卸甲一書生『毛沢東与毛家「小灶」』(明鏡歴史網, 13年6月13日)では、『我给毛沢東

- 当了23年厨師（作者を含む刊行情報は未記載）を引いて鶏肉が好きだと述べている。
- 145) 康輝の回想（注144参照）と卸甲一書生『毛沢東と毛家「小灶」』（依拠は『毛沢東健康飲食生活』〔著者・出版社・刊行時期は未記載〕80頁）の一致した見解。
- 146) 『毛沢東年譜（一九四九——一九七六）』、第3巻、7頁。
- 147) 権延赤『走下神壇の毛沢東』、90～92頁。
- 148) 権延赤『走下神壇の毛沢東』、58～59頁。
- 149) 『毛沢東年譜（一九四九——一九七六）』、第4巻、505頁。
- 150) 林克『我所知道的毛沢東——林克談話録』、中央文献出版社、2000年、172～174頁。
- 151) 林克『我所知道的毛沢東——林克談話録』、65頁。
- 152) 権延赤『走下神壇の毛沢東』、58頁。
- 153) 毛の最大の好物「紅焼肉」（権延赤『走下神壇の毛沢東』、105～110、140頁）は、周も春に特に好く食べていた（権延赤『走近周恩来』、217～218頁）。周が偏愛した「冰糖肘子」（『走近周恩来』、215～217頁）は、毛も好んで食べていた（林克『我所知道的毛沢東——林克談話録』、64頁）。
- 154) 権延赤『走下神壇の毛沢東』、105～107頁。
- 155) 『周恩来伝』第2版にもこの逸話は出ており（第3巻、1390頁）、脚注に元秘書の回想の一部の出処を為す「何謙：『再度聚散 一片深情』、『周恩来和他的秘書們』、中国広播電視出版社、1992年3月版、第284頁」と記してあるが、程華編著の同書に有る何の口述では、修繕は59年初めの周の2ヵ月間の出張中に鄧穎超にも無断で行った事で、周が2月に帰った後に怒って釣魚台賓館に泊まる様になり、3月15日からの天津視察中に彼を呼んで原状復帰を指示したと言う（283～284頁）。『周恩来伝』の編著者の記述では60年1月7～17日に上海で政治局拡大会議に出席し、広東省徙化で『政治経済教科書』学習班に参加した後に3月6日に帰宅したと為っているので、行政生活・警備担当の何の記憶は「国民経済困難時期」中か否かに関する1年のずれが有ることに成る。権延赤『走近周恩来』の詳述（149～155頁）では南方に於ける視察・読書の後の帰京時代の言及は無く、何を呼んで決着を付けた場所は天津ではなく釣魚台の執務室であった。
- この記録文学の「談話者」（語り手）とされる「何樹英」は、何謙・張樹迎（最後の護衛長）と雷英夫・郭英会（元軍事秘書）の合成である。周に仕えた数十人の取材対象の中で、40年から60年代まで周の護衛・副官・「機要秘書」（機密事項担当秘書）乃至護衛長代理を歴任した何は中心的に位置付けられているので、作中の記述は精査した上で上記何文の自説への修正かと思われるが、何れにせよ此等の文献の間の齟齬は当事者の記憶の曖昧さと記録の困難さを思わせる。
- 猶、同書『前言』では「何樹英」の来歴は最後に明かすと予告している（9頁）が、『走下聖壇の周恩来』の『後記』で明かした上記の正体は最後まで出ていない。『聖壇』の後記では『走下神壇の毛沢東』が当初受けた批判や協力者の李銀橋への不満を吐露しており（文中名指しを避けて「衛士（護衛）長」と表した李は刊行後に、貸し出した写真の返還と自分への非難に対する謝罪を求めて裁判を起し91年に勝訴した）、『神壇』で李を唯一の語り手として実名で登場させた事に起因した訴訟の悪い後味の所為か、『走近』では改題と共に『後記』も削除され『前言』中の件の文言との不整合が生じたが、この「龍頭蛇尾」ならぬ「龍頭無尾」の不備を招いた禍根は口述記録文学の危険性を物語っている。
- 156) 権延赤『走下神壇の毛沢東』、54頁。
- 157) 『毛沢東年譜（一九四九——一九七六）』、第2巻、581頁。
- 158) 李志綏『毛沢東私人医生回憶録』、152～153頁。英語版（1994年）に基づく日本語版（新庄哲夫訳『毛沢東の私生活』、文藝春秋、同年）では、「六月下旬」（上冊、221頁）という時期が出ているが、台北

版では「一九五六年」としか記されていない(152頁)。日本語版の「長沙はいやになるほど暑く、四十度前後を上下していた」も、台北版の「這時長沙の気温已到摄氏四十幾度」(当時長沙の気温は已に40℃を「数度」超えていた)と異なるが、新浪天気網の『長沙(Changsha)6月逐日歴史気候』の記録(1951～2008)では、40℃に達した事が1度も無く、『毛沢東年譜』に拠る5月30日も同『5月逐日歴史気候』では1958年の35℃が最高記録である。確かに56年の6月は平年より暑く、8日、9日の34℃、35℃と10日、25日の36℃は其々当該日の58年間中の最高と為ったが、1年中40℃を超えたのは53年8月13日の41℃だけなので、何月かの特定を避けた台北版も含めてこの点では不正確である。著者は54年以降付けた日記を「文革」初期に全て焼却した(台北版、11～12頁)ので憶え間違いは免れないが、20世紀中国の最高気温は53年8月15日の44.9℃(江西省修水县)なので、台北版の編集者が40℃台前半の印象に疑問を感じなかったのは、大陸の風土に疎い<sup>せ</sup>所<sup>い</sup>為<sup>も</sup>有<sup>る</sup>かも知れない。記憶の壁に阻まれた著者の記述の誤謬と共に惜しまれるが、本稿筆者はこの類の不備で第1級の史料としての価値を否定する<sup>つもり</sup>心算<sup>が</sup>無い。

159) 日本語版(上冊、222頁)の「老婆に質問者が中国共産党の主席だとわかっていたとしても、そのそぶりは微塵もなく、針仕事の手をとめて答えようとしなかった」は、相手の正体を認識していながら敢えて知らん顔をしたという可能性を示唆している様にも思えるが、当時の中国人は毛であることに気付いた上で無視する様な勇気も必要性も無かったはずである。台北版(153頁)では「那老太婆不知道眼前這位就是毛主席，自顧自補著衣服。」(老婆は目の前の人<sup>が</sup>毛主席だとは知らずに、<sup>ひたすら</sup>只管服を縫い繕い続けた)と為っており、最初から最後まで毛に一瞥もくれなかった(「根本未擡眼瞧毛一眼」と言うので、来訪者への無関心で毛一行を無視する結果に成ったと考えるのが自然であろう。本稿では著者が認めた中国語版を基準とし、原著を相当改編した英語版(及び日本語訳)の食い違いから真実や常識の追求・確認を試みたい。

160) 李志綏『毛沢東私人医生回憶録』、153頁。

161) 『毛沢東年譜(一九四九——一九七六)』、第4巻、78頁。

162) 竹内実訳、武田泰淳・竹内実『毛沢東 その詩と人生』(文藝春秋新社、1965年)49頁。猶、本稿中の毛沢東詩・詞の訳は基本的には竹内実訳に拠るが、個別の表記・書式で適宜変え一部の振り仮名を略した処も有る。従わない点は主に句読点の無い方式、及び訳文の1行中の1字空きの形である。この詞の上記引用の次の原文にも、「看 万山紅遍」(訳=「見よ 万山に 紅あまねく」という1字の空きが入られたが、次の頁に有る「問 蒼茫大地」(「問う 蒼茫たる大地よ」)、「恰 同学少年」(「ときもよし 同学の少年」)、「到 中流撃水」(「中流に到りて 水を撃ち」)も、毛が認定した公式の<sup>テキスト</sup>版本及び『沁園春』(詞の調べの1種)の規範的な様式にも合わないし、「到 中流」と「中流に到りて」とのずれの様に意味上も必要性が無いと思われる。更に、後出の「誰人曾与評説=誰人か かつて評説をあたえたる」(196頁)を「誰人曾与評説? (誰人か曾て評説を与えたる)」に直した様に、原文と対応する漢字を極力使うことにした。

163) 竹内実訳、武田泰淳・竹内実『毛沢東 その詩と人生』196頁。

164) 葉永烈『黒紅内幕——葉永烈采訪手記』、作家出版社、1999年、下冊453頁。

165) 楊繼繩『墓碑——中国六十年代大飢荒紀実』(「香港」天地圖書、2008年。日本語版=伊藤正・田口佐紀子・多田麻美訳『毛沢東 大躍進秘録』[文芸春秋、2012年])等、毛の<sup>マイナス イメージ</sup>負の形象を描くのに使う文献が多いが、毛を擁護する向きからの反駁も一方に有る。

166) 注164に同じ。

167) 張旭『為毛沢東掌勺年夜饭』、『小康』(中共中央『求是』雜誌社主催、月刊)2011年第2期。

- 168) 『栄養学家掲領導人的長寿秘籍』（北京軍区総医院栄養科主任李瑞芬・中央首長御用栄養保健専門家曾煦媛の談話で構成した記事）、鳳凰海南網 2013 年 11 月 4 日（39 健康網より転載。初出・作者名は未記載）。
- 169) 権延赤『走下神壇の毛沢東』、58 頁。
- 170) 李志綏『毛沢東私人医生回憶録』、326 頁。日本語版のこの件（下冊、45 頁）は、「劉少奇と周恩来は毛主席が肉食を断ったことが健康に影響をあたえはすまいかと心配して、私に主席が思いなおすように口説いてほしいと言ってきた。東北の各省から、この国の最高指導者たちへの贈物として虎と鹿の肉を送ってよこしたとき、私は主席にそれを食べてみるようすすめた。毛は断わった。/"それを共同食堂に送りなさい。そこならみんなもいくらか食べられるだろう"」と成っているが、台北版の記述の重要な相違として、①劉・周は汪東興に懸念を表明し、汪は李に適切なタイミングで毛に探りを入れて肉を食べるよう勧めて欲しいと言って来た；②毛が笑って言った返事の冒頭に、「你告訴汪東興」（君から汪東興に伝えてくれ）と有る、という 2 点が挙げられる。李に直接指示する立場の汪を抜きにして劉・周が李に言って来た事は通常考え難く、汪に言及した毛の言葉と合せたこの省略は読者に著者の自己顕示の印象を与えかねない嫌いも有るし、毛の信頼が厚く華国鋒時代に副主席に昇進した汪の中南海内の絶大の権勢に対する認識不足を思わせる。細かい違和感として「東北各省」の「各省」の確証が無い点も有るが、台北版の「有天早上，東北送来老虎肉和鹿肉」（ある日の午前，東北から虎と鹿の肉が送られて来た）では、東北地域の 3 省（遼寧・吉林・黒龍江）が揃って送り付け一斉に届いたという意味は読み取れない。更に言うなら、毛の指示は「將這些肉放在大食堂，給大家吃。」（此等の肉を共同食堂に送って，皆に食べて貰う）であるが，上記の「みんなも」と後の「毛主席が虎と鹿をわかちあたえた」は毛も分ち合ったと読める余地が有るなら（日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典』第 2 版 [全 14 卷, 小学館, 2000～02] の「わかち-あたえる【分与】」の語釈は「わけあたえる（分与）に同じ」で、「わけ-あた・える【分与】」の定義は「分割して複数のものに与える。分配する。また，自分の分を分けて他に与える」である），自分の分は残さず一括して共同食堂に与えるという毛の意志表示に合致し切れない処も生じて来る。「是不是留一点，交給厨房，做給你尝尝」（少し取って置き，厨房に渡して料理にさせ，少しでも賞味して戴く訳には行きませんか）という李の提案も却下されたが，日本語版の「主席のためにいくらかとっておくわけにはいきませんか」は簡潔ではあるものの，要人の特権的な「小灶」（専用厨房）と役人・職員の庶民的な「大灶」（共同食堂）の対極構図は反映されていない。
- 171) 張正隆『戦将韓先楚』，重慶出版社，2009 年，277～278 頁。
- 172) 李志綏『毛沢東私人医生回憶録』，3 頁。
- 173) 李志綏『毛沢東私人医生回憶録』，324～326 頁。
- 174) 注 168 に同じ。
- 175) 蘇林発・趙光『我給毛主席掌勺』、『伝奇・伝記文学選刊』（安徽省文学芸術聯合会主催・主管，月刊）2004 年第 4 期。楊繼繩『墓碑——中国六十年代大飢荒紀実』でもこの回想は引用・分析されている（香港版 330 頁）が，卷末の参考文献目録中（653 頁）の出処未記載の「蘇林達口述，趙光整理：『我給毛主席当厨師』」（日本語版 489 頁では当該回想の引用の後に「〔蘇林達口述，趙光整理『毛沢東のためのコックになる』〕」）で，蘇林発を「蘇林達」としたのは面白い誤記である。卸甲一書生『毛沢東と毛家“小灶”』では建国直後～1954 年の 4 人（当初は 2 名）の専属料理人に就いて，李希武は一部の文献で「李錫吾」とされ，廖冰夫は『紅牆医生』21 頁で「廖炳福」と記されたと言う。更に，同書（未記載の基本情報＝王凡・東平『紅牆医生——我親歷的中南海往事』，作家出版社，2006 年）の同頁に見

える「候貴友」は、厨房助手の何貴友であるとしている。「希武」(xīwǔ)と「錫吾」(xíwū)、「冰夫」(bīngfū)と「炳福」(bǐngfú)とは同音で(声調は異なる)、「何」(Hé)と「候」(Hóu)とは読み方が近いので有り得る混同であるが、「発」(fā)と「達」(dá)とは発音の類似性が薄いので本来は間違える可能性が低い。「発達」に由来した混線であるならば「発・達」の連用の頻度の高さを思わせ、「発財」(財成)・発展等の意に由って「発」に近い8(bā)が「吉祥数」<sup>ラッキー・ナンバー</sup>と為る理由への理解にも役立つ。

李家驥回想・楊慶旺執筆『領袖身邊三十年：毛沢東衛士李家驥訪談録』(中央文献出版社, 07年)では、専属料理人は北京入り後1953年までは高金文(延安時代以来)と劉景峰で、51年から廖炳福も加わり、他に候・黄(名前は未記載)の2人が短期間ながら居り、その後は韓阿福と西洋料理専門の田樹彬<sup>ひん</sup>であると述べている(下冊, 546～547頁)。これに拠ると「廖炳福」も「候貴友」の方が正しいと考えられるが、料理人に対して毛は特別な要求が無く、「窮人出身、政治思想好」(貧乏人の出身で政治思想が好い[革命的で党に忠誠心を持つ等])が好ましいと言う(546頁)なので、知識人的な「冰夫」より庶民的な「炳福」が高い信憑性を持つ。

- 176) 張旭『為毛沢東掌勺年夜饭』。
- 177) 『毛沢東年譜(一九四九——一九七六)』, 第4巻, 541～544頁。
- 178) 李志綏『毛沢東私人医生回憶録』, 330頁。
- 179) 李志綏『毛沢東私人医生回憶録』, 323～324頁。
- 180) 李志綏『毛沢東私人医生回憶録』, 152頁。日本語版(上冊, 221頁)の「突然、先頭と主席の左側で騒ぎが持ち上がった。“病院へはこべ”と人々が呼んでいる。湖南省公安局長李祥と、主席のために現地の警備態勢をととのえた責任者が水蛇に咬まれたのだという」では、同時多発の奇襲で2人が怪我したとしているが、台北版では毛の後ろ辺りに付いていた李だけが咬まれ、「有人叫道：“快送他去医院！”」(誰かが「速く彼を病院に運べ」と叫んだ)と言う様に、救急措置の要請対象(乃至訴求者)も1人であると記されている。両者の齟齬はともかく、現地警備の責任者である省公安厅長(「庁」は局の上に在り、この職位は日本の県警本部長に当る)の負傷は皮肉な話である。
- 181) 元秘書楊銀橋は『庭院深深釣魚台：我給江青当秘書』(当代中国出版社, 2014年)で、「巡撫出朝、地動山搖」と自称したその「江青出朝、地動山搖」の有様を披露した(69～75頁)。
- 182) 卸甲一書生『毛沢東与毛家「小灶」』(依拠は韓阿福『我給毛沢東当了23年厨師』[刊行情報は未記載])。
- 183) 曾思玉の回想, 『毛沢東伝(1949—1976)』1559頁。
- 184) 権延赤『走近周恩来』, 65頁。
- 185) 『周恩来年譜(1949—1976)』(中共中央文献研究室編, 力平・馬芷蓀主編, 中央文献出版社, 1997年)でも記されたこの事績は、夢菲『勇作自我批評的周恩来』(『党史文匯』[中共山西省委党史辦公室主管・主權, 月刊]2014年第2期)に詳述が有る。
- 186) 『耿飈之女耿瑩贊反腐：任其党的蛀虫發展這還得了』, 法制週刊報網2015年3月27日(作者・初出は未記載)。
- 187) 張正隆『戰將韓先楚』, 277～278頁。
- 188) 江青は1980年12月24日、「林彪・江青反革命集團」を裁く最高人民法院特別法廷の弁論で「毛主席の飼い犬」と自称した(葉永烈『「四人組」興亡』, 下巻1368頁)。
- 189) 竹内実記, 武田泰淳・竹内実『毛沢東 その詩と人生』50頁(注162参照)。
- 190) 張雲生『毛家湾紀実 林彪秘書回憶録』, 354～357頁。
- 191) 張聿温『林立果「小艦隊」興亡始末』, 257～266頁。

(夏 剛, 立命館大学国際関係学部教授)

## “新兴国·老大党”的蹉跌与考验（续1）

——由“王八蛋工程”、“571（武起义）工程”所窥见“先军党国”的劣化和变质

本文是《“新兴国·老大党”的蹉跌与考验——“2011.7.23”（中共“90诞辰”）高速铁路特大车祸的冲击和启示》（本刊上期第173—206页）的续篇之1。

前篇聚焦温甬线“和谐号”动车追尾冲突、脱轨颠覆特重大事故及处理失当，指出恰逢中共1大开幕90周年之日象征着“高龄”大党统治面临危机；事故信息传播、公众舆论发力的新形态使2011年堪称“民意直播元年”或“网民崛起元年”；时值辛亥革命100周年的这1年的本次事件或会以偶发的非暴力演变成为本世纪中国历史的拐点之一。

本篇首先由“7.23”特大事故的软件漏洞联系1998年长江流域特大洪水中的堤防脆弱，借朱镕基总理视察灾区时对偷工减料等的痛斥将该年命名为“‘豆腐渣工程’显露元年”，断言江泽民时代加速的腐败的本质之一为“权贵社会主义+赌博资本主义”的复合污染。其次引述林立果私党团伙草拟的政变设想提纲《“五七一工程”纪要》的“愤青”式批判，肯定其相当程度切中时弊、击中要害并认为毛泽东执意转发此件而引发民怨共鸣可谓失算，对9届2中全会上他无视甚至推翻高层内多数意见的独断专行视为家长制作风的恶劣表现。继而回顾以武力为后盾肃清刘少奇等党内政敌及其后借党纪作利器排除林彪等军内威胁，对照盟友朝鲜“金家王朝”的“先军政治”独裁分析“毛氏天下”的“先军党治”专制。最后通过透视3年全民饥馑、经济困难时期中毛为示俭约而数月不吃肉的“佳话”的虚实，以其“出朝”时的随心所欲及铺张排场的实例揭穿“禁欲垂范”背后的“禁域”特权。

（夏 刚，立命馆大学国际关系学院教授）

